

縛して二頭立て合
す此印弓箭の印
なり愛染の印は
二頭なり是れは
二頭は因にして愛
染王に果なる故な
り
蓮花 紅蓮な
り
妙見 此尊は
北辰と尊星王と妙
見と一體異名なり
諸星の中の上首に
して所作甚だ奇特
の天なれば名けて
妙見と曰ふ殊に
最勝の體なれば尊
星と云ふ此の法
す別しては眼病
の祈りに之を修
す

星形 圓満月
輪の形なり
蓮花云云 是
れ七星の形を木に
て作り針金にて七
星の天に運る形に
置く七星は妙見
より出生す此の
七星は釋迦生
輪の毛孔より生

曰羅、羅譏阿底瑟娑縛摩斛 誦に己身を觀するに金剛染菩薩の如し、威儀色相差別
有ること無し、即ち彼の人の前に在ることを觀せよ、一肘の身の下に紇哩字有り、蓮
花と成る、自身花孔より彼の人の身に入り、其の形體支分に遍すること猶帶衣を被た
るが如し上下諦に觀せよ、其の形無二なり、即ち眞言を誦して曰く、唵縛曰羅、羅譏
羅譏耶斛。

〇〇〇〇 妙見道場觀 「樓閣の中に荷葉の座有り、座の上に刃字有り、字變じて星形と
成る、形變じて妙見菩薩と成る、左の手に蓮花を持し、花の上に北斗七星の形を作
す、右の手は説法の印を作り、五指並べ舒べ上に向ふ、大母指を以つて頭指の側を捻
して手掌を下に向へ、天衣・瓔珞・瑠璃・環釧・其の身を莊嚴せり、五色の雲中に結跏趺
座して、眷屬圍繞せり。」〇讚に曰く、 諸天讚 曩謨率都菩多耶、曩謨率都菩多曳。
曩謨率都目紇多耶、曩謨率都目紇多曳 曩謨率都戰多耶、曩謨率都戰多曳 曩謨率
都尾目紇多耶、曩謨率都尾目紇多曳 〇根本の印 右の手を施無畏に作り、大
指を屈して身に向へて之を招く、三左の手を金剛拳に作して腰に安ず。 根本眞言

す。施無畏 施無
畏の印を結び身
之を招ぐは自ら
向けて招ぐは外
向へて招ぐは外
けて招ぐは外
指す成就院なり
廣澤の寛助なり
心譽は三井の人
り
八師子 八葉
の印の如し、但し
此の八星の印な
り
已上石山 石
山淳祐の御説な
り
平等房 永嚴
なり
五等身 清和天
王御眼病の御祈
に等身の像を作り
玉ふ
六紀籍 此一切
衆生の善惡を記し
帝釋天に告ること

に曰く、目眩帝、屠蘇吒、阿若密吒、烏都吒、具者吒、婆頼帝吒、耶彌若吒、烏都吒、
狗羅帝吒、耆摩吒、莎哥 〇奇妙心眞言 唵蘇底里瑟吒、娑縛訶 〇中心咒
心譽僧正の傳云々 唵摩訶室哩曳底利吠、娑縛訶 〇印 二手合掌して、二大
指二小指合はせ立て、餘の六指屈して八師子の印の如し。 以上石山 北唇菩
薩別行法に曰く、北辰菩薩を名づけて妙見と云ふ、諸の國土を擁護す、所作甚だ奇特
なるが故に名けて妙見と云ふ、閻浮提衆星の中に在つて最勝なり、神仙の中の菩薩の
大將なり。文 平等房に曰く、本朝往古圖書妙見の形像一途に非ず、印相も亦不
同なり、但し靈巖寺に等身の木像有り、左の手を心に當て、如意寶を持し、右の手
を與願に作す、大底は吉祥天女の像に同す、又尊星王の軌の説も様様なり、彼の文を
見るべし。 〇形像 四臂の像は赤白肉色にして眉を頰めて慈怒の形なり、右第
一の手には筆を持し、第二の手には月を持す、左第一の手には紀籍を持す、第二の
手には日輪を持す、天衣瓔珞皆前の身の如し、虵走つて青龍の背に立てり、右の足を
引き上げ腰を屈して地を視る相なり、右の邊に硯を持つ者の形を畫作す藥叉の面の如
し御本には面 天衣瓔珞を著せしむ、赤肉色を爲して甚だ可畏の形なり、皆黒雲の中に現
を而に作る

○若し云々若し施主あれば施主の方へ送るなり。○撥遣真言は十一面の撥遣なり。

○次に天像を水中に安す○次に諸天を迎請す○次に荷葉座○次に闍伽以下法則常の如し○次に天を灌ぐ法常の如し ○若し期日を満てば、其の水を湯に和して自身に沐浴すれば、能く一切の障難を除き意願満足す。云々 ○撥遣真言 恒備也他、弭致弭致、都致止都致止、藥羅藥羅、婆羅挽、引曩謨阿哩夜、縛路枳帝、濕縛羅、縛婆喃、無縛縛喃、娑縛合訶軌 ○天撥遣看言軌此には請の呪と云ふ、七返を誦して即ち淨水を下す、淨水の呪 唵譚拏羅只路（路に作るは莎訶）誦すること七返或は三返。 食の呪、水及び花香等の呪は、唵納惹夜耶、莎訶なり、若しは食香花に七返を誦す。○供養行、即ち撥遣の呪、唵摩度摩度摩邏耶莎訶七返を誦して、即ち撥遣を成す。○燈供養の呪に曰く、唵發吒返燈（返）燈（返）を加持して供養せよ。

○水歡喜天供法（小野）

○辨供○著座○普禮○三部○被甲○加持水○次に灌水を加持す七返 真言に曰く、曩謨囉怛曩、觀音。歸 恒備也他、訶訶訶壹里弭里止里尾里、企隸徒隸、娑縛合訶 ○觀音を水中に安す。 ○焚香の明 恒備也他、踰嚕跢嚕、訶訶訶、娑縛訶

○小野仁海僧正の作、之れ觀賢の御作を委めて製し玉ふなり。

○花の明 飯食燈明の明なり。

○道場觀 十一面の道場觀なり。

○後供 十一面の後供なり。

○花の明 恒備也他、悉里悉里、地里地里、悉里悉里、地里、莎訶 ○飲食の明 恒備也他、娑梨娑梨、悉里悉里索努、莎訶 ○普禮○五悔○四無量○大金剛輪○地結○四方結○道場觀○如來拳○虚空藏、伽陀○送車○請車○四攝○網界○大三昧耶○闍伽○普供養○禮佛○本尊加持印明。 外縛して二頭蓮葉の如し、二大指並べ立て四處を加持す。 唵縛日羅、合達麼紇哩（合） 百八を誦して、本尊加持、灌浴晨朝四百返、日午三百返、終つて普供、祈願。 ○後供○像を他所に移す。○淨水の呪に曰く、唵譚拏羅只路、莎訶（七返或三返） ○次に更に觀自在を欲する水を加持すること百八返して、天の大眞言を用ひて天を水中に安す。○迎請○荷葉座○闍伽、其の水を湯に和して浴すれば、一切の障難を除き意願満足す。○食香花等を呪して曰く、唵納惹夜耶、莎訶 ○撥遣の呪に曰く、唵摩度摩度摩鄢耶、莎訶、玄葬の譯に曰く、恒備也他、一達羅達羅、二地履地履三杜嚕杜嚕、四壹來伐隸、五折隸折隸、六鉢羅折隸鉢羅折隸、七俱紡迷、八俱蘇摩伐隸、九壹履弭履、十止履止履、一微知里（知里の社）反上、反十二戌陀薩埵、三莫訶迦囉尼迦、十娑縛訶五 若し身中に諸の障難有らば、所求の善事多く心の如くならず、衰禍時時因無うして至らば、香水を以つて此の像身を浴すべし、

復た此水を取つて之を呪すること百八返して、以つて毗那樂迦の像身を浴し、復取つて之を呪すること百八返して自其の身を灑すれば、一切の障難自然に消滅し諸有の所求意の如くならざること無し。

〇〇〇 水歡喜天頸次第

〇先づ辨供 六種供俱常如し蘿蔔酒團等圖 〇次に著座〇普禮〇塗香〇淨三業〇三部〇被甲〇加持香水〇加持灌水〇次に觀音の像を香水の中に安す〇次に加持供物〇覽字觀〇觀佛〇金剛起〇普禮〇表白〇神分〇祈願〇五悔〇發願〇五大願〇普供〇三力〇大金剛輪〇地結〇四方結〇道場觀〇大虛空藏〇小金剛輪〇送車輅〇請車輅〇召請已上觀音之 〇次に又送車〇請車〇召請已上本尊男天 〇次に四明〇拍掌〇虛空網〇火院〇闍伽〇蓮花座〇荷葉座〇五供の印明〇普供〇三力〇現供蘿蔔酒を供せざるなり 〇讚〇普供〇三力〇祈願〇禮佛〇入我我入〇本尊加持〇正念誦〇本尊加持〇字輪觀或は入我我入より字輪觀に至るまで之を用ゐず云々 〇本尊加持〇次に香花食等を供す方 〇次に浴水〇次に香花食等を供す左 〇次に觀音の像を本座に移し安す〇次に更に灌水を加持す〇次に天の像を多羅の中に安す〇次に天迎請の印明

云々 水歡喜天頸次第 祖野深若寺の元 小野難若寺の元 本致難若寺の元 類次第一元祖の面 第一男天と十一の面 小野同天と十一の面 是十一般若寺の次 此の法は天像を請す 前浴古は請雨の時 相應の修せざるが故 相法を修するが故 相應の修するが故 相應の修するが故

〇次に荷葉座〇次に蘿蔔酒團等を供す。方〇次に灌水〇次に蘿蔔酒團等を供す。左〇次に散念誦〇五供〇普供〇三力〇次に現供後 〇闍伽〇讚〇普供〇三力〇祈願〇禮佛〇廻向〇至心廻向〇解界〇撥遣〇三部〇被甲〇普禮〇次に天を取つて本座に居へよ〇出堂

〇〇〇 五十天供

十二天、二十八宿、九曜に、四臂の不動尊を加して、五十天と云ふなり。又五大尊を加して、羅睺と計都を除いて五十二天と云ふなり、五大尊、十二天、北斗七星、十二宮神、五星、二十八宿、以上六十九天なり。四臂不動、四大明王、十二天、大山府君、五道大神、大吉祥天、北斗七星、十二宮神、及び五星、二十八宿、以上七十二天なり。以上三寶院、後小野の四種念誦に之れ有り。御筆の本に曰く、五十天十二天。二十八宿。九曜。四臂不動四大明王を加して羅睺五十二天計都を除くなり。以上仁海僧正厚雙紙に之を載す。本次第には勸修寺法務の曼荼羅を掲ぐるも此に略せり

〇〇〇 梵天 「樋閣の中に荷葉の座あり、座の上に縛羅字或は有り、字變じて蓮花と成る、

法は國土行す即ち 法は國土行す即ち 法は國土行す即ち 法は國土行す即ち 法は國土行す即ち

梵天 息災等 梵天 息災等 梵天 息災等 梵天 息災等 梵天 息災等

(一) 三髻云云 三つの角の様に巻きたる髪なり。
(二) 淨處 訶利帝の法に於ては人に知らざる様にすべし、顯露になぜば悉地を成ぜず。
(三) 法に曰く 愛子成就の法なり。
(四) 又曰く 云云 此は夫婦不和を云ふは、夫に知らせしめ、安悉香を焼き此の尊を供養すれば、夫婦和合して宜し。此の利帝母の法なり。
(五) 歡喜母法 詞利帝母の法なり。
(六) 兵戈 兵戈の負求福に尤も相應なり。
(七) 運 安祥寺の惠運、次の觀は禪林寺の宗觀。

(一) 價を論云云 圖繪の時、價の高下を云ふことなかれとの意。

(一) 印 此印馬鳴の法に出る通り念珠にて咒を唱ふるに廿一返、千返は散念誦なり。

(一) 即ち成ず 此の法を修するもの富貴を得。
(二) 八の眞言 此の明は行法以前に各々三七返宛唱ひて後に行法に入るべし。

交へて坐す、右の手掌に吉祥菓あり、人に與ふる勢を作す、左の手掌を揚げて外に向けて五指を垂れ展ぶ、此れを滿願の印と名づく、印(異)には手に作る 略本に曰く、童子形にして、兩の手に各々菓子を持つて人に與ふ、頭上に(一)三髻角子サンケカウシを作す、(二)淨處に於て安置して眞言萬返を誦せよ。經に曰く三十萬返を誦せよ云々 廣軌に曰く、沈木香を焼いて此の像の前に對して、陀羅尼十萬返を誦す。」文 (三)法に曰く、我に心眞言有り、由摩尼珠ユマニジュの如く能く一切の願を滿す、閻浮堤の諸の善男女等を利せんが爲めなり。」(四)又曰く若し女人有つて男女に宜しからずんば香を焼いて供養せよ。云云形像別法等に具に(五)歡喜母の法等を引見せよ。

○寶藏天女 梵には吒羅 法天と云ふ

(袖書) 兵戈 勝負 求福。本書 寶藏天女陀羅尼法一卷、(七)運寶藏天女法一卷 觀吒羅法天女法一卷、觀

○種子吒羅 師傳に曰く ○三形寶珠 ○形像、寶藏天女陀羅尼法に曰く、其の畫像の法は、天女の身なり、長二尺五寸、頭に花冠を作す、點する所の花端正なり、身に紫袍・金帶・

烏靴・を著す、右の手に蓮花を把り、左の手に如意寶珠を把る、天女端正にして光明あり、(異)には此下に威徳無比の四有り。世間の畫師に能く畫する者無し、必ず須く好平カウヒヤウに(一)價を論ずることを得ざるべし。」云々 ○道場觀 「壇の上に五色の綵イトイロ有り、(異)には各々二尺一寸、(異)には一寸を五寸に作す。以つて座と爲す、其の上に恒羅字有り變じて寶珠と成る、寶珠變じて寶藏天女の身と成る。形像前(一)印 左の手中指無名指、屈して大母指を以つて二指の甲を押す、頭指及び小指を舒べて心の上に安ず、右の手に數珠を把り眞言を念誦す、此れを玉環の印と名づく。○眞言 唵吒羅伽吒羅伽、毗多羅彌、娑縛二訶一千返を誦し滿すれば合諸願意の如し。云々 ○寶藏天讚 微妙殊勝不思議 柔煥香鮮光如日 眉目端正最稀有 身膚細滑如兜羅 口中香氣滿人間 衆生親者欣瞻視 一心欲求如是人 常加敬慕心不疑 雖示世間種種事 畢竟速成清淨道 能使持者到菩提 相共同修無上法(異)には法を覺に成す ○修行の時節 五月五日前七日、乃至二七三日、及於百日、或は三十九日を取り、五月五日に至る迄満足せば、其の法(三)即ち成す。」 ○法の功能 能く世間に於て殊勝の事を行す、天を廻らし地を動かし、山を傾け海を覆へし、兵戈勝負志意の如くにして而も成す、財帛金寶積んで山岳の如くして世間に受用す。」又(八)の眞言有り、各

々須く清淨に沐浴して、新淨の衣を著し、佛前形像の前に於て、各三七返を誦して然して後に作法すべし。第一の眞言に曰く、唵、興婆羅帝吒、急急、娑縛合訶。唵、拔羅帝吒唎摩那羅、娑縛合訶。唵、勒叉那帝娑吒、娑縛合訶。唵、娑婆隸惹帝吒、娑縛合訶。唵、勃惹羅帝吒、娑縛合訶。唵、藥叉藥叉底那婆、娑縛合訶。唵、遮帝毘折曳吽吒、娑縛合訶。唵、折勒那唎婆帝吒、娑縛合訶。

〇〇大黑天神法則是天等通用の次第之を用ゆ。又別法則神愷の記に之を載す。見るべし。

(袖書) 二臂求福 六臂闘戰 神愷の記に曰く、師曰く、此法は最秘密なり、室に入らざれば傳授すべからず、千金に傳ふる勿れ、努力努力。」文以上袖書

〇種子丸。或はま〇三昧耶形、袋〇尊形奥に之。〇道場觀 「壇の上に阿字有り變じて樓閣と成る、其の中央に惡字有り變じて荷葉の座と成る、座の上に又或は字有り變じて袋形と成る、袋形變じて大黑天神と成る、膚の色、悉く黒色を作す、頭に烏帽子を冠らしむ、悉く黒色なり、袴を著せしめ、駟褰カウダて垂れず、狩衣カキモノを著せしめ裾短く袖細くせよ。右の手を拳に作して右の背(異)には背腰に收めしむ、左の手には大なる袋

二臂 世間流 布の像は二臂 胎藏外金剛部の像は六臂なり 神愷 眞雅僧 正御取立の人 後には聖寶に隨て學ぶ 嘉祥寺の神愷なり 種子 或は求福の爲めなり 關の爲めなり 右の手云云 佛師が胎拳に作るなふて植を合せしむ不可なりと。

を持たしめ、背より肩の上に懸けしむ、其の袋の色鼠毛の色を爲す、其の袋垂れ下れる程、臀の上に餘れり。」 〇印 内縛して、地水を舒べ來去す是れなり。 〇言 唵、密止密止、舍婆隸二多羅羯帝、莎訶 〇又の印 〇言 唵摩訶迦羅耶、

莎訶石山七集に出す 〇讚諸天の讚 〇發願本尊聖者。摩訶迦羅。大黑天神。諸大眷屬。私案なり舊樣尋ねべし 〇口傳に曰く、種子吽

〇三形囊〇形像様様一、神愷記の様は道場觀の如し。一、南海傳第一に曰く、坐して金囊を把り小狀に却踏す、一脚は地に垂れよ、毎に油を將つて拭ひて黒色を形と爲す。護摩集を見るべし隱者 一、胎藏の圖は六臂なり、胎藏界梵號集に曰く、三面六臂、前に左右に横へて劍を執る、左の次の手には人頭を執り髪を取つて提くるなり右の次の手

には羊を執つて把れり、且た次の左右の手は、象皮を背後に張る、獨體を以つて瓔珞と爲す、故本に曰く、黒淺色なり。」文 一、造像の量。神愷の記に曰く、五尺若くは三尺若くは二尺五寸、亦通して之を免るす。」文 一、名號 摩訶大迦羅黒

瑜祇經疏に曰く、吽迦羅。降三世迦羅名づく。降伏の義。又は黒暗と云ふ。 仁王經疏に曰く、迦羅翻して黒暗と云ふ。」大日經疏に曰く、摩訶迦羅天大暗夜叉、又迦羅と翻す。」文 一、本身神愷の記に曰く、大黑天神とは、自在天の變身なり。」又曰く、有人曰く、堅牢地天

二 隱者集 石山内供か又は澤方より出たる集とも云ふ。

三 故本の古本なり、八家の請來の初、請來の請來を新本ともいふ。

の化身なり。」又曰く、大日經疏に曰く、毗盧遮那、降伏三世の法門を以つて、彼を除かんと欲する故に、化して大黒神と作す。前後委く之を見るべし 文 一、功能 神愷に曰く、毎日炊ぐ所の飯の上分を供養せば、毎日必ず千人の衆を養ふ。」文又曰く、若し人三年(異)には年心を専にして供せば、世間の富を授與し、乃至官爵職祿惟に應じて悉く與ふべし。」又曰く、大衆の食屋に居禮供せば、堂屋房舎に必ず自然の榮聚集し、涌出す。」又曰く、吾が呪を、若し人常に持念し、四季に大に餽饈酒羹飲食、乃至百味を備へ、五更の時を以つて衆多の人に知らしめずして、吾を供せん者は、決定して富を與ふべし。」文仁王經良賁の疏に曰く、大黒天神は鬪戰の神なり、若し彼の神を祀れば其の威徳を増す。事を舉げて皆勝る、故に神に饗して祀るなり。因縁有り之を見るべし 又曰く、彼(二)大力有るを以つて即ち人を加護して、所作勇猛にして鬪戰等の法勝つことを得るなり。故に大黒は即ち鬪戰の神なり。」文大日經疏に曰く、(三)茶吉尼、能く人の心を取つて之を食す、故に大日如來、化して大黒神と作つて訶責して言はく、汝常に人を瞰ふ、我れ今亦當に汝を食すべし、是の如く方便を以つて茶吉尼をして人を害せしめざらしむ、取意なり、委くは本文を見るべし以上大黒天神法、要を取つて之を鈔す、委くは嘉祥寺神愷の記に見えた

(二) 大力有る云云此天を信ずれば運増し運強くす。
(三) 茶吉尼 此を降伏の時彼より一倍して身を現じて降伏す、其時必ず死すものならば七日以前に肝を食すべしと許す故に彼に食せらるゝものは決して死するなり。

(二) 成 成賢なり

り、但し件の書に異本之有るは廣略の不同なり、一本の端に大黒神の事、次に本書の文共に、胎藏梵號集、仁王の疏、大疏等の文なり、奥に大黒神行法の次第、以上一本、一本は前後の文同じ、中間の本書の文等は之無し、一本には端の神愷の記許りにして中間の本文並に奥の次第は之無し。
以上一見の次てに三本の異之を注す、他見に及ふべからず、金剛佛子(二)成

oocuu 襄虞梨童女法

「香醉山の上に寶樓閣有り、中に吽字有り、變じて黒虵と成る、轉じて襄虞梨童女と爲る、身綠色にして狀、龍女の如し、七頭を具足し項に圓光有つて四臂なり、右第一の手には三戟叉を持し、第二の手には三五莖の孔雀の尾を執る、左第一の手には一つの黒虵を把り、第二の手には施無畏なり、七寶の瓔珞、耳瑠環釧臂釧莊嚴せり、鹿皮を衣と爲し、諸の毒蛇を以つて瓔珞と爲す、諸虫蟒虵の類を伴戲と爲し、四面に圍繞せり。」(三)根本の印 二手相ひ博げて物を掬する勢の如し、小指を以つて相ひ並べて、餘の八指は各々散して微しく屈め即ち成す、自身の五處を加持す、所謂右の肩左の肩心

(二) 襄虞梨童女法 此法は大體といふ此法は毒虫の刺したる時、或は腫れもの祈りに修す、此の尊は如意輪の變化と云ふ、此の法は惠運請來の法より出たる通りなり。

(三) 根本の印 物を掬ふ勢の如し、鉢の印の如くし、なり、八指の間を開く

來在々所々此の尊
を造立し國土の兵
亂を退け衆生の安
全を増す。

(二)善見宮 帝釋
の善見宮なり。

△增長天○種子尾○三昧耶形、刀

△廣目天○種子尾○三昧耶形、三股戟。

△多聞天○種子伏○三昧耶形、寶棒

○道場觀 「地結の上、金剛牆の内に大海有り、海の中に須彌山有り、山の頂に阿字有り、(一)善見宮と成る、其中に荷葉の座有り、上に伊字有り獨股と成る、變じて帝釋と成る、金色にして三目なり、寶冠を戴く、右の手に一股、左の手に腰に安ず、山の半腹四面に各々阿字有り、變じて廣大樓閣と成る七寶所成なり、珠鬘瓔珞以つて莊嚴と爲す、樓閣の中に阿字有り變じて荷葉の座と成る、東方の座の上に地利字有り刀形と成る、持國天王と成る、赤色忿怒の形なり、左に劍を持し右は股の上を押す、南方の座の上に尾字有り變じて刀形と成り、增長天王となる赤色なり、右の手に劍を持し、左の手は拳に作つて腰に安ず甲冑を著せり、西方の座の上に尾字有り、變じて三股戟と成る、變じて廣目天王と成る、赤色にして甲冑を著す、右の手に三股戟を持し、左の手は腰の上に安ず、或は腰を押す北方の座に吠字有り變じて寶棒と成る、變じて毗沙門天王と成る、黃色にして左の手に塔を持し、右の手に棒を持す、四天王各々無量の眷

(一)帝釋印 獨股
の印なり。
(二)四天惣印 二
拳兩の火水の甲を
合せ二頭二地風し
て著せす、明三返
なり。

(三)四天王各別
印 青龍の軌に由
る、金寶集第六、
胎藏の次第に出
づ。
(四)散念誦 帝釋
四天王共に本地は
釋迦なれば之を尊
んで故に初に之を
出す。

(五)本尊段 本尊
段乃至加持迄は秘
紗に委く出るな
り。

屬有り前後に圍繞せり。」

○本尊加持印真言 △先づ(一)帝釋印 二手内縛して、二頭指直く立て合せよ、二

大指並べ立つ、真言に曰く、曩莫三曼多沒駄南、奢迦羅耶、娑縛訶 △次に(二)四天

王惣印 二手金剛拳に作り、二拳を相ひ合はせ二頭指二小指、各々立て、四指乍ら

共に鈎して著くる勿れ。口傳に曰く、二頭二小を以つて四天王の由を觀ず、所謂右

の頭指持國天右の頭指增長天左の小指廣目天右の小指多聞天此の如くに觀念すべきなり。△四天王

惣呪 唵阿吽羅欠、娑縛訶 口傳に曰く、此の真言の四字を以つて、四天王の種子

に配す、所謂、阿、國、持、吽、長、羅、目、欠、聞、此の定に之を配せよ。△(三)四天王各別印真言

○次に吉祥天印 八葉の印 常の如し、但し印の上に如意寶珠有りと觀すべし。所謂八葉の蓮花の上に寶珠を安ず。○真言 唵摩訶室利

耶曳、娑縛訶○正念誦 四天王の惣呪 前出の如し。 ○散念誦 佛眼、大日、釋迦、帝釋、四天、王、吉祥天、大金剛輪、一字。 ○伴僧の

呪 四天王惣呪なり。陀羅尼集經に出づ。 唵、漸娑羅謝鞞陀羅夜、莎訶 ○御加持の呪 伴僧の呪に同じ。 ○勸請

佛法護持四天王、吉祥天女諸眷屬 ○發願 四大大王、吉祥天女、八大夜叉

○禮佛 南無地利多羅瑟吒羅、南無尾嚕茶迦、南無尾樓跋乞叉、南無吠室羅

摩拏 ○讚 先づ四智次○護摩 増益に就て之を修すべし。。部主段 帝釋を以て。。本尊段、召請印明、撥

(一) 白縹云云 木綿の品々朝霞と
は品々の色 五色
(二) 金山 須彌山
のこと

(三) 古師遺唐書
此の欲界六天の眞
言は大唐へ尋れ
遣はされたる書に
云ふ

(四) 商羯羅 此に
骨練といふ 初禪
の主なり

(五) 大自在天印
毘遮摩首羅代々
の佛出世し玉ふ時
は憂惱ある故に此
の事思推するこま
なり

種瓔珞あり、(一)白縹朝霞を著す、右脇の上の角に絡ひ披けり、脚に(二)金山を踏む、蓮花の外に於て、日月諸天、護世の四天王等有り。」○第一眞言、唵仰義引夜引也、薩縛引合○第二天眞言、唵尾曩引藥迦也、薩縛引合○第三天眞言、唵藥拏鉢底商哩合○第四天眞言、唵尾伽曩合尾曩也迦引也、薩縛引合○第五天眞言、唵鉢羅合縛羅悉地迦引羅也、薩縛引合○第六天眞言、唵魔醯引濕縛合羅迷踰引也、薩縛引合 古師遺唐書に曰く、未だ東寺、天台誰の祖 此の六天の眞言此の如くの所説は何故有るや。」文以上平等房

○魔醯首羅天、又(四)商羯羅と名づく、具緣品の疏に曰く、魔醯首羅一世界の中に於て大勢力有り、三千界の主には非ず、經の下の文に更に嚕捺羅有り、即ち是れ商羯の忿怒の身なり、事に従うて立を名つ。」文 護摩軌に曰く、伊舍那天舊には魔醯首羅と云ふ、亦大自在天と云ふ。」文 ○或は曰く、自在天 嚕 三戟 印、左の手の中指之を立つ。 唵嚕捺羅野莎呵 ○大自在天 平等房歡喜自在と、大自在天の兩種之を出だす、形像各別なり ○梵號、魔醯首羅○種子、摩○三形、三戟 ○尊像、三目八臂にして白牛に騎る。 説文未だ見す古 ○本尊の印は、熾盛光儀軌に出ず。 ○(五)大自在天の印、 惠の羽五輪を舒べて

(一) 伎藝天女法
此法は聖天浴油運
々の時に修す、又
藝術を好むもの別
切を修する、其外一
願を成ずるに隨て
り、殊に天福に
修す。此の天は福
自在の所生所求
満の天女なり。

(二) 我が壇云云
常の壇の上に敷
茶羅を敷き其の上
に像を置く、此れ
即ち曼茶羅なり。

頰を承く、儼然として住す。 ○魔醯首羅 此には大自在天と云ふ眞言 曩莫三曼多沒駄南、唵嚕係曳呬、摩系濕縛合羅野、娑縛合賀 ○欲界自在伊舍那眞言注小自 曩莫三曼多沒駄南、嚕捺羅耶、娑縛合賀。 智度論に曰く、大自在天那羅延天、俱摩羅天、此三天之を恭敬すれば、一切の願を得せしむ。 意を取る。具には 本文を見るべし。 ○(一)伎藝天女法

魔醯首羅天王、髮際の中に於て一人の天女を化出す、顔容端正にして伎藝第一なり、一切の諸天能く勝る者無し、大衆の中に於て是の言を作す、我今一切有情を利益せんと欲すが爲めに、祈願する所の豊饒吉祥富樂の事、心の希求に隨つて悉く能く満足す、諸の業藝に於て速に能く成就す、我に秘密陀羅尼の法要有り、今應に之を説くべし、即ち陀羅尼に曰く、曩謨引 椴支摩 旋旋地尾鉢羅合 鉢地野引 試迦羅者嚕鉢合 恒爾野合 他引濕縛合 惹底隸吠羅摩惹哩爾吽引 發吒音 娑縛合賀 若し一萬返、乃至十萬返を誦し満つれば、一切の諸天一切の鬼神歡喜を生ず、隨逐侍衛して常に行者をして豊饒吉祥ならしむ、若し持誦して其の證驗を求めんと欲せば、先づ(二)我が壇を書し、並に我が像を書き壇の中に安置して法の如く供養すれば、即ち疾く驗を證し即ち疾く成就

すべし

○大自在天女畫像法 先づ魔醯首羅天王を書けよ、三面六臂なり、顔貌奇特端正にして可畏なり、其の髮際より一人の天女を化生す殊妙可喜なり、天上人間に能く勝る者無し、天の衣服を著し、瓔珞身を嚴ざる、兩の手腕の上に各々環釧有り、左の手上に向へて一の^(一)天花を捧げ、右の手下に向へて^(二)裙を捻する勢を作す、身の形、長三尺なるべし、或は大小に随つて^(三)稱量を取るに任かせ、畫像畢り已つて法の如くに壇中に安置して供養せよ。

○伎藝天女成就の印 二手合掌して、二無名指二中指外に相ひ又へて、指の面を其の手背に著け、二頭指微しく^(一)盛めて頭實に似たり、二大指頭並べて來去して即ち成す請召の明を誦して曰く、曩謨、引魔醯濕縛^(二)合羅引野、^(三)楯支摩胃引試^(四)法野、^(五)噫醯引去^(六)、^(七)娑縛^(八)合訶引 此印を結び已つて、此の明を誦するに随つて、七返請召すれば、本天と諸眷屬と、悉く皆降至して種々加備す、此の印を結び根本の明を誦して、心額喉頂を印すれば即ち護身を成す、一切の鬼魅敢て親近せず。(異本) 其の法は必ず須らく師に従つて親授して、淨室に密かに加持して念誦し畢る毎に^(一)淨き縮帛を以つて天の形

(一) 天花 天上の花なるべし。
(二) 裙を捻云 右の手を以て襖を引き上る勢をなす。
(三) 稱量 本尊の御身量なり。

(四) 淨き縮帛 本尊の尊の上に綾等の絹を掛くる事は古は此の天に局らず餘求開持のみには

像に覆ふべし、輒く此法を餘人に向うて説くことを得ざれ、若し妄りに之に泄さば身を終るまで効無からん、之を慎め之を鎮め。」文壇の中心に於て本天の形像を安置し、左右に於て各々二天を安す。 以上成蓮房

○伎藝天女真言 曩謨引^(一)楯支摩^(二)施^(三)法地尾鉢羅^(四)合鉢地野^(五)引^(六)試^(七)引迦羅者嚕林^(八)合怛爾野^(九)他^(十)引濕縛^(十一)合悉底^(十二)隸吠羅^(十三)摩惹哩^(十四)爾^(十五)吽^(十六)引發^(十七)吒^(十八)音^(十九)娑縛^(二十)合訶 若し我が此の陀羅尼を誦持せんと欲はん者は、先づ須らく道場を建立すべし、法の如くに嚴飾して種種の香花を以つて供養をなせ、二七日或は一七日に於て齋戒を受持し、^(一)其の姪欲を斷じ此の陀羅尼を誦し、五萬返或は十萬返を滿せよ、其の中間に於て酒肉葷穢を食すること勿れ、至心誦持すれば天女現前して種々加備し、一切の願求皆悉く満足す、此れより已後障礙有ること無し、乃至妻子輩穢も亦制斷せず、若し能く淨持せば最も速驗を爲す、後に用ゆる所有れば應に成就すべし。」文

○魔醯首羅大自在天神通遊戲變化頂生衆伎藝天女成就の印 二手合掌して、二無名指二中指外に相ひ又へ、指の面を其の手背に著け、二頭指微しく盛めて頭實に似たり、二大指並べて來去せよ即ち成す、請召の明を誦して曰く、曩謨引魔醯濕縛^(一)合羅引

(一) 其の姪欲云 此の法は在家にも授け修さしむ故に之を制す。

(二) 神通攝召云
の中節の處に横指
え頭指を以て中指
す、外に向て中指
三度召ぐ結び悪し
鉤する如くせよ。

野椶支摩引試法野、臆醜引咽、娑縛引二合 詞 此の印を結び已つて此の明七返を誦するに随つて、本天と諸の眷屬とを請召すれば悉く皆降至して種々加備す。(朱)備は被か
○次に(二)神通攝召の一切印を結べ 右の手の中指を以つて直く立て、次に無名指を以つて中指の後に苾苾在り、頭指を以つて無名指の頭を鉤し、大指を以つて横たへ頭小二指の甲を押す、中指を以つて鉤する勢の如く、外に向へて鉤しく身に向ふて來去せよ、即ち是れ根本の明を誦して、娑縛訶の字の上に於て、召く所の者の名を加へて之を誦す、若し此印を結ぶ明を誦し一切を攝召すれば、悉く皆立どころに至る、是の印も亦一切の處に通じて用ゆ、若し怨賊惡人に逢ふて相ひ刑害せんと欲せば印を結んで其の中指を展べて彼に望んで之を搦く。呼皮の反 裂なり自然に散壞す、諸の惡鬼神に之を指せば消滅す、此の印を結んで根本の明を誦して心額喉頂を印すれば即ち護身を成す。
○畫像の法 先づ魔醜首羅天王を畫せよ、三面六臂なり、顔貌奇特にして端正可畏なり、其の髮際より一人の天女を化生す、殊妙可喜にして天上人間に能く勝る者無し天の衣服を着して瓔珞身を嚴ざる、兩の手腕の上に各々環釧有り、左の手上に向ふて一の天花を捧げ、右の手下に向ふて裙を捻する勢を作す、身の形長三尺なるべし、或

(二) 大小云云の寸
尺に任せて分量の寸
尺とす。

は(二)大小に随つて任に稱量を取つて畫像了れ。 其の法は必ず須らく師に従ふて親しく受くべし、淨室に密持し毎に念誦したはれ、淨き絹帛を以つて天の形像を覆ひ、轉く此の法を説くことを得ざれ、餘人に向ふて若し妄りに之を泄さば、身を終るまで効し無からん 之を慎め之を慎め。 法に曰く、一切有情の祈願する、豊饒吉祥富樂の事、心の希求に随つて悉く能く満足し、諸の業藝に於て速かに能く成就せしむ。』又 以上平等房の十卷鈔に之有り。

○深砂大將次第

○種子阿○三昧耶形、索 印を作して本尊の方に向つて普禮を爲せ。○真言に曰く、阿怖留阿怖留、娑羅娑羅、娑婆訶 印を作して禮する事三返、淨三業の印を爲せ。○真言如し 印を作して額に當て、佛部と爲せ。○真言如し 印を作して右の肩に當て、蓮花部と爲せ。○真言如し 印を作して左の肩に當て、金剛部と爲せ。○真言如し 印を作して五處に當て、護身と爲せ。○真言如し 印を作して額に置いて上方界と爲せ。○真言如し 印を作して心に置いて相ひ招いて請本尊と爲せ。○

(二) 深砂大將此
尊は毘沙門天の
變なり諸事一
一明の法なり
罪の爲に又令
久住佛に隆爲
に之を修す又
福の爲にも修
一印の法は求
持此の法のみ
り、秘法なり
右蓮花を左に
剛拳に普禮は
結界なり。上方

（二）印を作して云此の印にて本尊の形像を觀するなり。
（三）炎火界 火院なり。

（三）印を作して入我々入なり、乳字變じて蛇となり蛇變じて本尊となりるを觀す。
（四）右の手胎拳なり。
（五）大指來去 召請の時に之を來去するなり。

眞言如し。二 印を作して前に置いて定印と爲せ。○眞言如し 印を作して頂に置いて炎火界の印と爲せ。○眞言如し 印を作して闍伽の器を取つて承事と爲せ。○偈に曰く、善來尊者、由本願故、降赴加持 ○次に印を作して塗香の供養と爲せ。○次に印を作して花供とす○次に印を作して焚香の供とす○次に印を作して飲食とす○次に印を作して燈明供養とす○次に印を作して普供養とす○次に三方偈如し○次に印を作して定印所觀如し○次に念誦○次に後供養如し○次に印を作して成就撥遣○次に護身○次に惣廻向○次に出堂 諸印を説くこと一印、曰く（四）右の手拳に作して（五）大指來去す。以上石山

國譯薄雙紙 諸尊法第二終

○種叫○三鋒或傳並十卷鈔○三蛇十卷鈔 ○種阿○三索○印 金剛合掌 ○言 唵摩訶阿蘭怛羅耶、娑縛訶 ○又の呪 阿怖留阿怖留、娑羅娑羅、娑縛訶 十萬返を誦し滿つれば富貴を得成就圓滿す。以上成蓮房。 常曉の錄に曰く、此の神は北方多聞天王の化身なり。文或は曰く、觀音の所變。云云 因縁有り、本誓功力等念誦法、並に常曉の錄を見るべし。

國譯秘鈔

目次

- 卷八○正觀音 ○千手 ○馬頭 ○十一面 ○準提 ○如意輪 ○不空絹索 ○白衣 ○葉衣 ○大勢至
- 卷十三○不動付安 ○降三世 ○軍荼利 ○大威徳 ○金剛夜叉 ○烏瑟沙摩 ○金剛童子
- 卷一○阿闍 ○寶生 ○彌陀 ○釋迦 ○藥師 ○佛眼
- 卷二○大佛頂 ○法輪 ○尊勝付如寶
- 卷三○光明眞言 ○後七日
- 卷九○延命 ○普通延命付招魂 ○五秘密 ○五大虚空藏
- 卷十○虚空藏 ○求聞持
- 卷十一○普賢 ○文殊 ○五字文殊 ○八守文珠 ○同鏡 ○彌勒 ○大勝金剛 ○隨求 ○地藏

の理趣觀音の印は
通途にあらず。

(一) 八葉の印 諸
觀音通用の印な
り。
(二) 降三世 蓮合
印母の時は中の頭
を開かず。

に又右の頭指を以て三度左の掌の内を搔く。此の印は八葉を開くの義なり。而して五
指は五葉なり、今三葉之無し、仍て三度掌の内を搔き今三葉を開かしむ、總じて八葉
を開くなり。問ふ、理趣經觀音段の印は、右の小指を以て八葉を開く、今頭指を以て之
を開くはいかん。答ふ、此印に本より兩説あり、或は小指を以て之を開き、或は頭指
を以て之を開く、俱に是れ説説を爲すと雖も、花は風に開くの物なり、今風指を以て
八葉を開く其義相ひ叶へり、仍て専ら頭指を用ふるなり、理趣經の法に至ては大師御
傳の文なり、小指を以て之を開くべき旨顯然なり、故に尤も其定め用ふべきか。眞言
頌哩 ○又の印 胎藏觀音の印 ○八葉の印 常の如し 曩莫三曼多沒馱南、薩縛他他葉多縛嚩
吉多、迦嚩拏摩野、羅羅羅囉囉、娑婆訶 ○又の印 (三) 降三世大軌に出づ、
是れ蓮花五股の印か 二手蓮花
合掌して、二大指二小指開き立て著くること勿れ。 ○眞言 青龍寺の密傳 唵縛曰羅達麼
頌哩、陂呬但洛哩惡。口傳に曰く、眞言の末を以て五佛種子觀を印の上に置く、二
中指の上に陂字、左大指の上に呬字、左の小指の上に恒洛字、右の小指の上に頌哩字、
右の大指の上に惡字、此の如く觀じて之を置く、五佛事を觀じ蓮花部の五智を表すか。
問ふ、五佛種子は既に觀じ畢り三形の尊形を觀せざるか。答ふ、只種子許りなり、

(一) 散念誦 馬頭
白衣は蓮華部の部
母、詞梨帝は蓮花
部の守護、大威德
は西方蓮花部の教
令輪なり。
(二) 裏書なり
本次第の裏に書し
たるなり。以下之
に准ず。

(三) 諸尊段 皆本
尊三摩地なり、是
は三十七尊蓮花を
持する故なり。

三形の尊形之を觀せず、但し又觀するも強ひて僻事に非ざるか。

以上三種の印明の用否意に任す 常には之
を用ふる

○正念誦

唵阿嚩力迦、娑婆訶、此の

明を用ふ。

○散念誦 佛眼。大日。無量壽。本尊三種、千手。馬頭。十一面。○伴僧、並に御

加持には、

唵阿嚩力迦、娑婆訶を用ふ。 ○勸請 大慈大悲觀世音、蓮花部中諸聖

衆。 ○發願

正觀世音、蓮花部中、

○密號

正法金剛 ○禮佛

南無、阿里也縛路吉帝、入縛
羅、冒地薩怛縛、寃訶薩怛縛

○讚

先づ四智 常の如し

次に法菩薩の讚 (三) 裏書法菩薩の讚は必
ず之を用ゆるに

自在、

清淨離垢、

龍持一切經

音聲、

紫綠、

三有、



龍持一切經の
經を異本には
性に作り、秘
鈔問答には性
に作る、今本
に經に作るは
甚だ不可なる
か、宜しく性
に作るべきか
(取意)

縛曰羅鉢那摩蘇輪馱迦、路計濕縛羅、
蘇縛曰羅乞叉、縛曰羅寧怛羅、曩謨
娑都帝。 ○字輪(裏)
○護摩 息災に就いて之を
修す。或は敬愛。部主段 千手を以
て馬頭。或。本尊段。自加持印明。召請
印明。撥遣印明。諸供物呪 唵阿嚩力
迦娑婆訶。
加持物呪。 ○諸尊段 三十七尊之を請す。
皆本尊三摩地に入る

誕の時之を行せり近くは又醍醐賢覺之を行せしか。異本

○如意輪法金に曰く大梵は深遠にして天道の三障を破る。梵は是れ天 ○種子兼 ○三昧耶形、
金剛寶蓮

口傳に曰く、青蓮花の上に寶幢あり、寶幢の上に赤蓮花あり、赤蓮花の上に八幅輪あり、輪の上に如意寶珠あり。之を以て三形と爲す。是れ秘密なり。 ○道場觀 「前に阿字あり變じて寶樓閣と成る、其の内に壇場有り、四面に皆階道有り寶樹行列せり、皆瓔珞羅網を垂る其の壇場の上に紇里字有り、變じて紅蓮花臺と成る、其の上に阿字有り變じて滿月輪と成る、輪の上に紇里字有り、其の左右に亦但洛但洛字有り、其の三字變じて金剛寶蓮と成る、口決前の如し即ち變じて本尊と成る、六臂にして身金色なり、頂髻に寶莊嚴冠あり、自在王に坐し説法の相に住す、身より千光明を流し、項背に圓光あり、三右第一の手は思惟し、第二の手は如意寶を持し、第三の手は念珠を持す、左第一の手は光明山を按し、第二の手は蓮花を持し、第三の手は輪を持す、六臂廣博にして體能く六道に遊ぶ、大悲の方便を以て諸の有情の苦を斷つ、八大觀音、及び蓮花部中の無量の眷屬、前

○種子 兼 ○三昧耶形、
金剛寶蓮

○如意輪法
金に曰く大梵は深遠にして天道の三障を破る。梵は是れ天

後に圍繞せり。私曰く二臂、四臂、六臂、十二臂經に見えたり。 ○印眞言 ○根本の印 二手虚心合掌して心に當て、二中指圓の契を結んで實形の如くす。此 ○眞言 娜謨囉但娜但羅夜也、娜謨陀唎耶縛魯枳帝、入縛羅也、菩提薩但縛耶、摩訶薩但縛野、摩訶迦嚕泥迦耶、但姪他、唵祈迦羅鉢、震踰摩泥、摩訶鉢頭迷、嚕嚕底瑟吒入縛羅、阿迦哩漉耶。吽泮吒、娑縛賀 ○心印 前の根本の印の如し、但し二無名指二小指外縛せよ。唵鉢頭迷、震踰摩泥入縛羅吽 ○中心印 二手外縛して、二頭指を立て合はせ、中節を疊めて實形の如くし、二大指並べ立て、二無名指立て合はせ二小指右を以て左を押し交へ立てよ。 ○眞言、唵縛羅 囉鉢頭迷吽 ○正念誦心 ○散念誦 佛眼。大日。阿彌陀。本尊。正觀音。千手。馬頭。白衣。訶利帝。大金。一字。 ○伴僧大 ○御加持大 ○勸請、大聖如意輪觀自在、蓮花部中、 ○發願、如意輪觀世音、蓮花部中、 ○密號 持寶金剛 ○禮佛 南無阿利耶、眞陀摩尼、胃地薩埵、○摩訶薩埵返三 ○讚 先づ四智常の如し ○次に本尊讚 迦上莽攞 慕佉一迦莽攞蘆、引左曩、二迦、上莽攞、引薩曩、三迦莽攞訶薩踰、二合 迦、上莽攞、引婆吽 慕曩、五迦、上莽攞、迦莽攞、糝婆、上婆、六薩迦攞、上莽攞訶薩引 攞娜、七納牟斯都二合 底、八 ○護摩 敬愛に就いて之を修す。或は息災。或は増益。 ○部主段 金に曰く、正觀音小野馬頭野 ○本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪。 ○諸尊段 三十七尊之を請す

○中心印
二手外縛して、二頭指を立て合はせ、中節を疊めて實形の如くし、二大指並べ立て、二無名指立て合はせ二小指右を以て左を押し交へ立てよ。

(一) 寶鏡 瑜祇經
に觀音の三摩耶形
に圓鏡を説き玉ふ

(二) 又の眞言 此
れ一印二明なり
前印を改めざる方
宜し。白處尊 白衣
葉衣同一體なり

(三) 葉衣 葉衣も
白蓮の中に住し玉
ふ。蓮葉を以て衣
と爲る故に此の如
く名づく。以下皆
所持物なり。

(四) 右手 施願の
印なり。右手施願
に置れ下し願の印
に少く上願の印に
て同じ事なり。

(五) 未敷蓮花 此
の未敷蓮花の果を
敷く。又一切衆生を
救ふ。三形を紙玉に
入る。菩薩に入ると
は觀音菩薩に並ぶ
る。奥疏は觀音部
に並ぶる。

圍繞す。像の頂上に觀自在王、說法相に住す。頭上は淨天衣を以て覆ひ垂れ、左手に(一)寶鏡を執り、右手に揚柳枝を把る。身白色にして寶山に安立す。北斗七星及び一切星宿本身を顯現して圍繞せり。○印 二手内縛して、二頭指圓く立て合はせ、二大指並べ立つ。曩謨囉怛曩合但羅夜引野、一曩莫素摩、薩羅縛諾乞灑合但羅、邏惹野者都地波阿引去路迦羅野、但爾也他、唵努摩跋努麼底、薩賓上傳法細、娑婆訶。○(三) 又の眞言 印者に於て前印を改めず。或説には金掌。唯濕吹帝濕吹帝半摩羅縛悉爾莎訶。○正念誦小 ○散念誦 佛眼、大日、本尊大呪、同小呪、正來、如意輪。大 ○伴僧呪 ○御加持呪 ○勸請 本尊界會 (三) 白處尊、蓮花部中、諸聖衆 ○發願 白衣觀音、蓮花部中 諸尊聖衆 ○禮佛 南無阿利耶半摩羅縛悉爾 ○讚 先づ四智讚 次に西方讚 照に曰く前法 の如く出す。 ○護摩 息災に就いて 部主段 正觀音を以つて。本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪。○諸尊段 六觀音之。○世天段 ○支度 ○卷數 佛眼眞言、大日眞言、正觀音眞言、本尊眞言、金剛吉祥成就明、妙吉祥破諸宿曜明、成就一切明、馬頭眞言、一字金輪眞言。

○(四) 葉衣法 ○種子姿 ○(五) 三形、吉祥菓、石榴、金に曰く、又は鉞斧、又は未敷蓮、又は彌索。 ○道場觀 「樓閣の中に八葉の大蓮花臺

閣の中に紇里字有り、八葉の蓮花臺と成る、臺の上に阿字有り變じて月輪と成る、輪の中に薩字有り變じて吉祥菓と成る、變じて葉衣觀自在菩薩と成る、天女形にして首に寶冠を戴けり、冠に無量壽佛有り、瓔珞環釧身を莊嚴す、四臂有り、右第一は心に當て吉祥菓を持し、第二手は施願手に作し、左第一の手に鉞斧を持し、第二の手に絹索を持して蓮花に坐す、無量の相好圓滿なり、二十八藥叉將等の眷屬、前後左右に圍繞す。○印 左手蓮花掌に作り膝の上に安す、絹索を持す想へ、(二) 右手縛哩呼引發吒 ○又の印の八葉の印 ○眞言 ○正念誦 前の眞言を用ゆ。○散念誦 佛眼、大日、王、白衣、馬頭 前出の眞言 ○御加持呪 上 ○勸請 葉衣觀音大悲尊、二十八諸藥叉。○發願 葉衣觀音 蓮花部中 、、、 ○密號 異行金剛(注) ○禮佛 曩謨阿利耶、伴但羅奢縛利。○讚 智 ○護摩 息災に就いて。○部主段 正觀音或。本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪。○諸尊段 六觀音之。○世天段 ○支度 ○卷數

○大執至 ○種子姿 ○三形、(三) 未敷蓮花 ○道場觀 「樓閣の中に八葉の大蓮花臺

(一)大金 廣澤流
にては此の大金剛
輪を入れざるなり

(二)息災 息災は
諸尊通用、但し五
壇の護摩の時必
す調伏に修す。
(三)法三云云 是
れ則ち大師の御傳
なり。
(四)俱利迦羅 龍
の梵語なり。不動
の化身に俱利迦羅
といふあり。

(一)七莎鬘 七覺
支を表す。
(二)一辨髮 髮の
前垂れ下るをいふ
此尊の持者の形の
所以なり。
(三)十四根本云云
薄次第に出す。
(四)獨股 薄雙紙
にあり。
(五)劍印 此印順
逆加許り、此印順
五處の加持は、十
此の印には種々の
を傳あり、又方五
の明は、殘施食明
の故に、殘施食明
切事業成辨の眞言
三昧耶印に慈救
の呪を用ひ、慈救
の印、五股の印、此
の印、二頭をソラ
印の習なり。

有り、上に月輪有り、輪の中に索字有り、字變じて未敷蓮花と成る、蓮花變じて大勢
至菩薩と成る、肉色にして、左の手に蓮花を持し、右の手は胸に當つ、地水火の三指
を屈して赤蓮花に坐す、眷屬圍繞す。○印二手蓮花に合掌して、二中指
少しく開き立て著くる勿れ。○眞言 曩莫三曼
多沒馱南、糝糝索、娑婆訶 ○正念誦前出の
眞言 ○散念誦佛眼、大日、正觀音、本尊、
白衣、馬頭、○大金、一字。○伴僧
並に御加持之無し。○勸請 本尊聖者大勢至、蓮花部中、
勢至 蓮花部中、
○禮佛 阿利耶摩訶薩他麼波羅波多。
○部主 阿彌陀を以つて部主
○本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、
諸尊段七十。世天段 ○支度○卷數 以上卷八

國譯秘鈔卷十三

○不動法金に曰く、
息災、調伏。 ○種子法三御子の傳言
俱利迦羅」祕說なり。 ○又の説○種子法三御子の傳言
俱利迦羅」祕說なり。 ○道場觀 「壇の上に惡字有り、變じて五峯八柱の寶樓閣と成
る、寶幢幡蓋珠鬘瓔珞四面に懸け列れり、其の中央に殊妙の壇場有り、其の上に瑟瑟
座有り、座の上に憾字有り變じて利劍と成る、利劍變じて大聖不動明王と成る、身青

黑色にして大忿怒形なり、大盤石の上に半跏坐するなり、火生三昧に住して、頂に七
○莎鬘有り、左に一辨髮を垂れ、額に水波皺有り、右手に利劍を執り左手に絹索を
持す、遍身より火焰を出し普く法界を周遍す、悉く自他の罪障、及び諸の難降の類を
焼き盡す、無量の聖衆眷屬前後に圍繞せり。○印眞言十四根本の印別 ○根本印獨
大指を以つて二無名指の甲の上を押せ。 ○火界呪 曩莫薩縛但他、引葉帝毗樂、合薩縛目契毗
藥、合薩縛但羅、合吒、贊摩訶路灑擊、欠佉 引四佉 引四、薩縛尾觀南二佉但羅合 二佉
憾給。○劍印左右劍印に作し、右の頭指中指を以つて左の大指無名指小指の間に挿け、次に右の頭指中指
を以つて鞘に指す此
の如くして之を觀す。 曩莫三曼多縛曰羅二赦、戰擊摩訶引噓灑擊、沙頗二佉耶 二佉但羅吒、
哈給 ○大惠刀の印大精進惠劍
名づく。 ○一字明 曩莫三曼多縛曰羅二赦給 ○心印二手
掌して、二
頭指を屈して甲を合はせ二大指
を並べ立て、二頭指の側を押せ。 ○殘施食明 曩莫三曼多、縛曰羅二合 南、但羅吒、音阿暮
伽贊擊、摩訶路沙擊二合 引吒也、佉但羅二合 摩也但羅摩也、佉但羅二合 音憾給 ○七
三三昧耶攝召印二手内縛して、小指を
開き立て著くる勿れ。 ○眞言 曩莫薩縛沒馱母地薩但縛二合 南、阿引莽選尾
迦羅二合 多帝爾阿遷逝、娑婆引二合 訶 ○師説に曰く、三三昧耶攝召印、前の慈救呪如し、此の
説は小野流の専ら傳ふる所なり。○五股の印二手外縛して、二中指二大指二小指共に立て合は
せ、二頭指を屈して二中指の背に立て著くる勿れ

(一) 獨股の印を押す
(二) 水の甲を押す
(三) 火の甲を押す
(四) 水の甲を押す
(五) 火の甲を押す
鎮宅印は、水と火の甲を押す。鎮宅印は、水と火の甲を押す。鎮宅印は、水と火の甲を押す。

(一) 般若云云
(二) 般若云云
(三) 般若云云
(四) 般若云云
(五) 般若云云
般若云云、般若云云、般若云云、般若云云、般若云云。

に皆卍字有り變じて十二天と成る、形色持する所一皆具足す、諸天各無量にして眷屬前後に圍繞せり。○印真言○(一) 獨股の印二指を以て二無名指の甲の上を押せ。○鎮宅呪莫三曼多縛曰羅赦、贊摩訶囉左擊、乞叉莽薩縛多、瑟駄波羅南、縛曰羅婆波、始置多縛怛耶、縛曰羅佉尾南、娑頗吒耶、呼怛囉吒憾給、左右の指に作し、右の頭指中指を以つて右の指無名指小指の間に挿む、次に右の頭指中指を引出して順逆加持す、次に前の如く之を挿む。右を以て銀さな、左を以て鞘となす、即ち銀を以て鞘を指すなり。此の如く觀念すべきなり。 曩莫三曼多縛曰羅赦

戰摩訶囉左擊沙頗吒耶呼怛囉吒憾給 ○正念誦佛眼、胎大日、鎮宅呪、慈救 ○散念誦佛眼、胎大日、鎮宅呪、慈救 二天、法施任意、 ○伴僧呪振鈴以後、各々慈救呪を唱ふ、成護摩の後、八方天の眞言を誦す、所謂八口伴僧 大金、一字。 ○護摩息災に就いて、火天段常の如し。部主段(一)般若菩薩を 常の如し。 ○次に不動讚照に曰く不動法の ○護摩息災に就いて、火天段常の如し。部主段(一)般若菩薩を 種形、輪、三昧。 本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪。 最莫三曼多縛曰羅。 諸尊段常の如く之を行す、但し、世天段常の如く之を行す、但し、水天は殊に杓を加ふ。 問ふ、水天

大聖明王 十二大天 諸眷屬等 ○禮佛、南無阿利耶阿遮羅毘跋地也囉惹以下四尊各一返 縛曰羅蘇婆備 縛曰羅軍荼利 縛曰羅焰曼德迦 縛曰羅藥叉 ○先づ四智讚

殊に杓を加ふるの義云何。答ふ、恐らく之を燒失するの義ならんか、此の義儘かに師傳に非らず私案なり。沈・龍腦・鬱金・安悉・等、一器に和合して散香並に塗香に用ふ。○壇上の莊嚴 本尊には十二天曼荼羅を懸く、中央に四臂不動、廻りに十二天 當日之を圖す、又伴像一幅之を畫くべし、是れ結願の後梁中に籠め奉るの時、本尊若し大ならば其の煩有る故なり。本尊の前に護摩の壇を立て、大壇小壇無し唯護摩壇あるのみ 息災の壇を塗る、壇の形並に三昧耶形常の如し、但し壇の底に三股輪を畫く、其の外、壇の上の支具供物等常の如し。中瓶の後に五寸の金銅の不動像を安す。帳中に之を入 初夜の時、十二杯蠟燭之に居ふ、穀飯小豆飯を ○修行日の事 壬癸並に亥子等の日殊に吉たり、件の日は結願を開白するの日に當つべし。師説には、彼等の日、殊に結願に之を當つ。文但し是れ大旨なり、他の日と雖も開白結願せしむるは常の事なり。○結願の作法寅の尅に 行法結願の後、書像本尊を取て之を巻き、竹筒の中に納めて堅く蓋を覆ひ、其の筒は、施主の生氣の方 寢殿の中心梁の上に之を藏す、日を兼ねて梁の上に懸 鎮宅眞言、並びに加持所住處の眞言、同じく相具して之を籠む、仲等の眞言は、本本尊の(一)表紙より之を書すべし、兼ねて又籠め奉るの時、散念誦を以てする時、諸の眞言等一一(一)印を結び呪を誦し、一百八返之を加

(一) 表紙 表具なり。
(二) 印を結び成る。
(三) 此れ本尊と成る。
(四) 觀す、十二天の時も各々の三摩地に住す。

(一) 部主 不動は
調伏の時 金剛手
は息災の時 阿闍梨
金剛なる故に 教

(二) 種子 種子三
字は軍荼利三部の
所變あるなり。丸
は佛部の所變、丸
は金剛部の所變、蓮
とに用ゆ。蓮花部
令輪なれば 南方
智の理智事の三點
三毒を破す。即ち

唵縛日羅、迦羅吽吽、蘇婆僞、吽吽 ○正念誦大 ○散念誦佛眼、大日、不動、本尊、軍荼利、
○伴僧大 ○御加持大 ○勸請 降伏三世大明王、四大八大諸眷屬 ○發願 降三世
明王、四大八大、諸大忿怒。○密號 最勝金剛 ○禮佛石南無縛日羅蘇婆僞返 金に曰
耶囉 ○讚四 ○護摩 調伏に就いて之を修 部主 不動を以て本尊と 木尊段 自加持印
明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、小 加持物呪 ○諸尊段 五大尊之を請す 世天段 ○
支度 ○卷數

○軍荼利法 ○三種子丸 ○三形 三股金に曰く ○道場觀 「大海の中に寶山
有り、山の上に樓閣有り、樓閣の中に阿字有り、兩邊に吽字有り三股と成る、三股轉
じて甘露軍荼利明王と成る、四面四臂なり、右の手に金剛杵を執り、左の手に滿願の
印、二手羯磨印を作し、身に威光焰鬘を佩び、月輪の中に住して、瑟瑟盤石青蓮花の
上に坐す、正面は慈悲、右第二面は忿怒、左第三面は大笑を作し、後第四面は微しく
怒つて口を開く、毒龍を瓔珞とし、虎皮を裙と爲す、無量の眷屬圍繞して侍衛せり。
二臂、四臂、八臂、千臂 ○印真言 ○根本の印 羯磨印 右手五指を舒べ小指を屈し、大指を以て小指の
意の所樂に隨ふ。云々 ○印真言 ○根本の印 羯磨印 右手五指を舒べ小指を屈し、大指を以て小指の

(一) 又の印 此の
印は内三股の印の
被甲の印ともいふ
別して一字金輪の
障りを除く。

(二) 諸尊段 調伏
の時五大尊、息
災には三十七尊な
り。如意寶棒 毘
沙門と同じ棒の
上に如意寶珠ある
なり。道場觀 滿の
通りなり。

ること無く、隙あらしむ、左手同じく此の印を
作し、右腕を以て左腕を押し相ひ交へよ。真言 唵阿密里帝吽吽 ○又の印 三股印、金に曰く
二手虚心合掌し、二小指内縛して、二無名指を屈して背を合せ、二小指より之を縛せしむる間掌に入れ二中指を
立て合はせ二頭指を屈し、二中指の背に立て着けず三股の如くし、二大指を並べ立て二無名指の背を押し、二中
指の間に ○真言大 曩謨囉但曩合 但羅二夜也、一 曩麼室戰合 摩賀縛日羅合 俱路二合
馱引也、二 唵三 戶嚩戶嚩、四 底瑟吒合 底瑟吒、五 滿馱滿馱六 賀曩賀曩、七 阿密哩合
帝、吽發吒、音 娑縛引合 賀。引 ○又の印 大三昧耶の印、此の印明は陀羅尼集經に見ゆ。手
内縛して、二中指を立て合はせ、二頭指を屈して二中
指の背に立て着くること勿れ、二大指を並べ立てよ。 ○真言 唵商迦隸摩訶三昧焰、娑縛賀 ○
正念誦 唵阿密里帝吽發 ○散念誦 佛眼、大日、不動、本尊真言、降三世、 ○伴僧大 ○御加持呪大
○勸請、甘露軍荼利大明王、四大八大諸眷屬、○發願、甘露軍荼利、四大八大、諸大
忿怒。○禮佛 南無縛日羅軍荼利返 ○讚 四智、又儀軌に在り、○護摩 調伏に就て之を修す、
部主段 不動を以て 本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、唵阿密里
帝吽吽
加持物呪。 ○諸尊段 五大尊之を請す、 世天段 ○支度 ○卷數

○大威徳法 金に曰く所望 種子糞 ○三昧耶形、如意寶棒。 ○道場觀 「觀想せ
よ、大海の中に寶山有り、山の上に七寶樓閣八柱四門有り、左右に吉祥幢有り、諸の

○薩埵羯磨 金剛薩埵の威儀は、
○五眼 五智の
功徳なり。

藥乞叉と成る、三面六臂にして衆器、弓箭劔輪及び○薩埵羯磨を持す、○五眼有て忿怒形なり、三首馬王髻、衆寶遍く嚴飾し。遍身火燄燃えて劫火の如し、四波羅蜜、四佛、十六大菩薩、二十五輪、各本位に住し、八供四攝、十六大護、乃至無量の眷屬前後に圍繞せり。○印眞言○根本の印二指を内縛して、二小指を立てて相鉤し著くる勿れ、二大指を並す如く、口傳に曰く、此の印は、摩竭魚の首を表はす、二小指は二牙なり、二中指二無名指、内縛せしむるは齒なり、二大指二頭指の間を以て、兩眼と爲す。○眞言 唵摩訶夜乞叉、縛曰羅薩怛縛 弱吽鑊斛、鉢羅吠奢吽 ○又の印二指外縛して、二小指を直ぐ立して牙の如くし、屬くる勿れ、○眞言 唵、吒枳吽娑破吒、合鉢羅、合吠捨耶、吽吽引○又の印右手金剛頭指小指共に立て舒べ小しく鉤す、左手同じく此印を作り、兩指相對して著くる勿れ、兩指の間四五六寸許りのを去るべし、二指此の如く印を結び兩指共に口に當つ、左右同じく頭指小指をして三度來去せしむ傳に曰く、二小指二頭指を以て四牙と爲し、此の如く觀すべし。○眞言 唵縛曰羅夜乞叉吽 ○正念誦大 ○散念誦佛眼、大日、不動、本尊、眞言、降三大 ○御加持呪呪 ○勸請 金剛夜叉大明王、四大八大諸眷屬 ○發願 金剛夜叉四大八大 諸大忿怒 ○禮佛 南無縛曰羅夜乞叉返三 ○讚 先づ四智○次に金剛牙菩薩の讚 縛曰羅二藥乞叉、合摩呼播引耶、縛曰羅二對瑟吒羅、合摩訶引婆耶、摩

○打車棒 車の
箭なり。

○又の印 此の
印は時に結すと
する時に結すと
○又の印 右拳
を右の乳の程に置
き左に向ふなり。

羅、鉢羅末禰、縛曰路藥羅、三合縛曰羅、二戰拏、曩謨牟引薩都合誦、四 ○護摩調伏に就修す、或は息災、或は敬愛、。部主段不動を以て部主と爲す。本尊段 自加持印明、召請印明、檢遣印明、諸供物呪、加持物呪。○諸尊段五大尊之を請す或は三十七尊。世天段 支度、卷數。

○烏菟沙摩法石山並に金に之を載せす。金に曰く、産生。

○種子○三昧耶形、獨股。○道場觀 「樓閣の中に大壇有り、壇の上に吽字有り

變じて獨股杵と成る、杵轉じて烏菟沙摩明王と成る、大忿怒形にして、目に赤色、身を通じて青黒色、舉體焰起る、四臂にして右上手に劔を執り、下の手に絹索、左上に○打車棒アヤウシヤボウを執る、下の三股又は器仗の上に並に焰起る、虎皮を纏と爲し、蛇を環路と爲す、夜叉及び阿修羅衆、訶利帝母愛子等を以て侍従とせり。」○印獨股の印、二指内縛して、二少指を立て合はせて心前に向ふ、○眞言 唵縛曰羅引、俱嚕、合駄、摩訶摩羅、訶曇娜訶、跛者、尾

駄望、合娑耶、烏樞瑟麼、合俱嚕、合駄吽吽吒、音娑縛、引賀引 ○又の印内三股の印、二指内縛して、二中指を立て合はせ、二頭指を屈して二中指の背に立て、二大指を並べ立て二中指の節文を押せ、○眞言 唵瑟哩摩哩、摩摩哩、摩哩、瑟瑟哩、娑縛賀 ○又の印二手蓮花の拳、肘拳なり、此の印眞言は本尊加持等の處に之を用ゐず、腕に往く時專各々眞言一返を誦す、

ら之を
用ひ、
○眞言 唵俱嚩駄曇、吽弱 ○正念誦解讀 ○散念誦佛眼、大日、不動本尊三種、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉、大 ○伴僧呪之無 ○御加持呪之無 ○勸請 穢跡金剛大明王、金剛部中諸忿怒 ○發願 不淨金剛 金剛部中 諸大忿怒。○禮佛 南無烏樞沙摩尾囉耶囉惹 ○護摩。部主段不動を以て部主と爲す。本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪 加持物呪。○諸尊段五大尊之。世天段 支度、卷數。

○金剛童子法金に曰く所望、產生

○底里賞俱底里は三賞俱は古なり、故に三股の事なり。
○母沙羅捧 珠
○鐵杵形 棒頭
鐵なるをいふ。

○種子 三昧耶形、三形 ○道場觀 「壇の上に鏡字有り大海と成る、海の中に寶山有り、山の上に吽字有り、變じて三股金剛と成り、變じて金剛童子形と成る、身の色吠瑠璃の如く、六臂を具足し相貌充滿す、面に三月有り、目は赤色なり、首に寶冠を戴き、狗牙上に出づ、口は下唇を咬み、眉を嘖めて威怒す、右の足を以て寶山を踏み妙蓮足を承く、左の足海水の中に在りて半ば膝を没す、右の第一の手足は底里賞俱金剛杵を持し、二手は母沙羅捧を持す、棒の一端は鐵杵形の如し、三手は鉞斧を持し、左の一手は棒を把り、二手擬る勢の如くす、金剛拳に作し、頭指を舒ぶ 三手は劔を持す、大蛇

○道場觀

「壇の上に鏡字有り大海と成る、海の中に

○根本の印 内獅子の印なり。

○又小呪 常に唱ふ可き呪なり、印なれば上の印を用ゐて宜し。

を以つて身に絡繫し、一切蛇を以て膊劍・臂劍・瓔珞・耳璫と作し、一大蛇を以て腰を繞ること三匝なり、身背の圓光火焰圍繞し、火焰の外に於て雷電有て、以て相輔翼す。○印眞言 ○根本の印二手虚心合掌して、二無名指を深く相ひ交へ、二頭指を屈して二無名指の甲を押して、二無名指を著せしめ、二大指を並べて偲げ立て二中指と二寸許りのを去る ○根本眞言 曩謨引囉但曩、合 但羅、合 夜野、一 曩莫室戰、合 擊、縛日羅、合 播引擊上曳、二 摩訶藥乞漉、合 細曩、引鉢多、上 曳、三 但爾也、合 佗、去聲 唵、五 迦拏度曩、六 吽、引發吒、中 娑縛、引 賀、七、引 ○獨股の印二手内縛して、二大指を以て掌に入れ二小指の甲を押して、二頭指を立て合はせし ○眞言 唵、引薩縛弩瑟吒、合 縛、向 切、羯羅、二 迦拏、矩嚩、引 馱、三 囉乞漉、合 唵、引 娑縛、引 賀、四、引 ○師子爪印二手各々五指を舒べ、五指少しく鉤し、指隙を去り掌をして外に向けしめ、兩手の印著くる勿れ、其の間を去るべし ○隨心眞言 唵、引 迦頓度摩、二 吽、引 發吒 ○又小呪 印に於ては之なし、唵 迦頓吽 泮吒心眞言と名く ○正念誦隨心 ○散念誦佛眼、大日、本尊、金剛手、降三世、大金、一字 ○伴僧呪 ○御加持呪 ○勸請 金剛童子忿怒尊、金剛部中諸聖衆。○發願 金剛童子 金剛部中 諸、禮佛 ○讚 護摩 ○調伏に就て之を修す、或は息災 ○部主段降三世を以て部主と爲す。本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪。○諸尊段調伏の時は五大尊息災の時、三十七尊之を請す。世天段 ○壇場莊嚴 壇中に舍利を安じ之を修す、白檀三指像之を置く、○支度 ○卷數

（二）薬師 阿闍世
同體なり、阿闍世
は阿闍世、阿闍世
り、阿闍世、阿闍世
分る、阿闍世、阿闍世
消災の軌を請來し
て已後之を分つ。
（三）金剛薩埵
之を用ふるは因果
不二なり。

（三）寶生法 此尊
は過去の寶生なり
又は多寶如來とも
いふ、又金剛妙經
には金剛薩埵とい
ふ。

（二）右羽 右の手
なり。

（三）印眞言 左拳
にして置く、此の
印眞言は五指
の端より如意を
雨す、故に能令一
切有情如來寶珠の
印と名く。

（三）吉祥天 寶生
の垂迹なり。

羅合囉、引惹弱、
△金剛愛、二手外縛して二頭指交へ立
して、二頭指を屈し甲を合はせ、二大指を並べ立て、二
頭指の側を押し、縛を解かすして二度彈指せよ、
唵縛曰羅計都藍、引度索、
○正念誦、
○御加持呪、
○勸請
阿闍如來 金剛部中、諸眷屬等、
○禮佛 南無阿乞芻毗也、薩他他葉多返
讚 先づ四智讚、
○次に、金剛薩埵誦 縛曰羅薩埵縛、摩訶薩他縛、縛曰羅薩
縛他他葉多、三曼荼耶但羅、縛爾跋、縛曰羅跋傳、曩謨娑都帝
○護摩之修す。
部主段、大日を以て、
○本尊段 加持印明より召請印明、檢遣印明、諸供物呪、加持物
呪、諸尊段、世天段 支度、卷數。

○寶生法

○種子字、○三昧耶形、如意寶珠
○道場觀 「觀想せよ、妙高山の頂に阿字有り、
七寶宮殿樓閣と成る、樓閣の内に師子座有り、座の上に阿字有り大月輪と成る、月輪
の中に紇里字有り。變じて寶蓮花臺と成る、臺の上に但洛字有り、字變じて如意珠と
成る、如意珠變じて金剛寶如來と成る、頂より黄金の光を放つて、無量世界を照す、

（二）右羽は施願の印にして、定手は拳を膝の上に仰ぐ、相好圓滿なり、前の月輪中に金
剛寶菩薩、右の月輪中に金剛光菩薩あり、左の月輪中に金剛幢菩薩、後の月輪中に金
剛唵菩薩、其の外八供養四攝等、本位に依て住し、外金剛部の諸天圍繞せり。○
印眞言 ○與願の印、
○眞言 唵囉但曩三婆縛但洛、弱吽
解 ○又の印、
○眞言 唵囉但曩三婆縛但洛、弱吽
印眞言 ○寶部四菩薩印眞言、
△金剛寶、
○眞言 唵囉但曩三婆縛但洛、弱吽
眞言 唵縛曰羅囉但曩唵、
△金剛光、
○眞言 唵囉但曩三婆縛但洛、弱吽
此印三度、
○眞言、
唵縛曰羅囉但曩唵、
△金剛幢、
○眞言 唵囉但曩三婆縛但洛、弱吽
唵縛曰羅計都藍、
△金剛唵、
○眞言 唵囉但曩三婆縛但洛、弱吽
念誦、
○散念誦、
○伴僧呪、
○御加持呪、
○勸請
平等性智寶生尊、寶部内證諸眷屬、
○發願 寶生如來 摩尼部中 諸眷屬等
○禮佛 南無囉但曩三婆縛薩多他葉多返、
○讚 先づ四智讚、
○次に寶菩薩の讚
縛曰羅囉但那、蘇縛曰羅、羅他縛曰羅迦餘、摩訶摩泥、阿迦餘葉婆、縛曰羅茶、縛
曰羅葉婆、曩謨娑都帝、
○護摩之修す、
○部主、
○本尊段 自加

持印明、召請印明、大鈎召印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪、。諸尊段三十。世天段
○降三世五重結護に曰く、○支度 ○卷數。

○阿彌陀法

○種子衆 ○三形、三八葉紅蓮花五股を以て莖と爲し之を以て ○又の説 八葉紅蓮花五股を以て莖と爲す

師曰く、常途の傳には獨股を以て莖と爲す、一師の傳には、五股を以て莖と爲す、共に證據有り。用否に於ては行者の意に隨ふべし。文此の内五股を以て莖と爲す事に由緒有り。口傳に曰く、蓮花は即ち理にして、五股は即ち五智なり、此の理智和合の體を以て常住佛性の形と爲す、即ち是れ胎藏の蓮臺なり。今我が性の心蓮を以て彌陀の三昧耶の身意と爲す、理趣釋に見ゆ。

○道場觀 「觀想せよ、心の前に三紇里字有り、八葉の大蓮花と成り、法界に遍す即ち極樂世界なり、其の中に阿字ア有り、變じて五峯八柱の寶樓閣と成る、此の宮殿の中に紇里字有り、大蓮花と成る、蓮花の上に曼荼羅有り、曼荼羅の上に阿字有り、滿月輪

大師の降三世云云、五部の事委き故に、此の所に書きしに、思召して書きしに、け玉ひしも、遂に思出し玉はざりしに、爲なりと。八葉は八佛と云ふを以て相傳とす。獨股莖とす。智の義なり。

と成る、滿月輪の上に又紇里字有り、八葉の蓮花と成る、上に紇里字有り大光明を放て遍なく法界を照す、其の中の有情此の光に遇ふ者は、皆罪障消滅を得ざること無し、此の字變じて八葉の紅蓮花と成る、五股を以て莖と爲し或は一結の上、横はれる五股の上に立つ、口決其の蓮花遍なく法界に滿つ、亦た大光明を放つ、光明中に無量の化佛有り、法を説き生を利す、此の蓮花變じて觀自在王如來と成る、身量廣大にして無量由旬なり、妙觀察智印を結び、身色閻浮檀金の如く、諸の毛孔より無量の光明を流出し、項ツノイッに圓光有り。圓光の中に無量の化佛有り、觀音勢至等二十五菩薩、乃至無量無邊の菩薩聖衆眷屬前後に圍繞せり、亦た其の極樂世界は七寶を以て地を爲し、水鳥樹林皆法を演ず。」

○又た説、小野中尊前の如し、但し五智の寶冠を戴き孔雀に坐す、八大菩薩を眷屬と爲し及び四攝八供す。文 ○又た説く小野眞言集 唵阿密唎多帝際賀羅吽ム曰く八大菩薩當するか。 ○自觀 定印にして、觀自在菩薩三摩地に入る、心月輪の上に紇里字有り大光明を放つ、其の字變じて八葉の蓮花と成る、花の臺に觀自在菩薩有り、相好分明なり、左手に蓮花、右手は開敷の勢を作す、八葉の上に各如來有り、入定し結跏

○又の說、仁海なり、此の說は五智寶冠を戴き紅梨色の蓮花を精の赤紅梨色のなる故に紅梨色のなる故に

○鉢 一切衆生皆法器ならしむる義なり。

○智吉祥 釋迦如來は五濁末世に出でて説法す之に由りて世界皆吉祥なる故に智吉祥と名く此の印説法印なり。○此の印は常の法界定印の間より袈裟を出す分なり。○此の印は羯磨の形、又は羯磨輪なり、二中指は輪推と觀す。○金輪 金輪は釋迦と全同なる故に。

○梵語三段 吉慶梵語の贊なり、釋迦の八相を讚歎する義なり。

○釋迦法○種子形 ○三昧耶形、○鉢金に曰く諸師迦樓羅座と成る、座の上に紇里字有り蓮花臺と成る、臺の上に婆字有り、變じて鉢形と成る、變じて釋迦如來と成る、身黃金色にして三十二大人相を具し、八十隨好を備ふ、心の上に説法の印を作し、赤色の袈裟を着て蓮花臺に坐す、無量菩薩聲聞、恭敬して圍繞せり。○印眞言○根本の印之を智吉祥の印と名づく二手五指を舒べ中指を屈し、大指を以て中指の甲を押せ、二羽此印を作り、右を上にして之を覆せ、左を下にして之を仰。○眞言 曩莫、三曼多沒馱南、婆、薩縛吃哩捨囉素娜曩薩縛達麼、縛始多、鉢羅鉢多誦誦曩、三麼三麼、娑縛訶。○又の印鉢印左手に袈裟の角を取リ、五指を舒べ廣下に仰け、右手同じく五指を舒べ、左の手の裏に背を屬せよ、二指相重れ、二大指柱げ合せよ。○眞言同羯磨會不空成就の印 唵阿謨迦悉帝惡又の印金界三昧耶界不空成就の印二指外縛して二中指を屈。○眞言同羯磨會不空成就の印 唵阿謨迦悉帝惡○正念誦大呪、或は歸命婆 ○散念誦佛眼、大日、本尊、(五)金輪、普賢、文殊、不動、降三世、大金、一字 ○伴僧呪胎藏釋迦院眞言 ○御加持呪上 ○勸請 大恩教主釋迦尊、羯磨部中諸眷屬。○發願 大恩教主 牟尼薄伽 金剛天等或説には羯磨部中 諸眷屬等 ○密號 寂靜金剛 ○禮佛 南無耆迦菩提薩但他藥多返 ○讚 先づ四智の讚常の如し○次に北方讚 縛曰羅羯磨蘇縛曰

羅訖孃羯磨縛曰羅蘇薩縛誦羅縛曰羅謨伽麼呼囉哩耶縛曰羅尾濕縛曩謨娑都帝 ○或は説く

先づ四智 次に梵語三段常の如し 以上の本尊讚には縦ひ北方讚を誦し、縦に梵語を誦すと雖も、後供養の時聲を出して誦すべからず、只密かに唱ふべきなり、
○護摩息災に就い。部主段金輪を以つて部主と爲す。本尊段 自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪。加持物呪、○諸尊段三十。世天段 支度。卷數。

○藥師法(注)金に曰く、除災延命、產生。 ○種子鞞(注)金に曰く、十二上願の壺と名づく、是れ祕事なり。 ○道場觀 「觀想せよ、心前に阿字有り、變じて淨瑠璃世界と成る、其の上に大空殿有り、七寶を以て莊嚴す、其の中に大曼荼羅壇有り、壇の中に阿字有り月輪と成る、輪の中に紇里字有り、變じて八葉の蓮花と成る、花臺の上に鞞字有り、變じて藥壺と成る、變じて藥師如來と成る、光明映徹相好圓滿せり、殊に十二大願を發して濁世の衆生を化度す、日光月光等諸大菩

山(二)の印は下書合の寶
二大も立少異あり
今に註に兩腕相去
故に註に一寸計り
招くは二大を内へ
縛するは八指を
合するは一切衆生
病を招くは一切衆
施さむるは一切衆

(三)月光菩薩此
印蓮花の上月に
を觀すと觀ず
宛ありと觀ず

(一)増益 増益に
付ては必死の病人
と云ふ時は病を除
かんとするは第一
を延ぶるは第一に
し先づ増益に修
修す 輕病は息災に

(二)七佛藥師法
北斗七星功徳經に
は七佛の所變に
とては此の處に
七佛の所變を習ふ
自家にはなし
金剛吉祥なり
金剛白曜金剛
界の大日の相
なり 奢摩他胎藏
部不二を顯す

薩、及び十二神將七千藥叉と共に、前後に圍繞せり。○(二)印て三度來去せよ。兩腕相ひ立
寸計り。 (注)金には寶 山の印云ふ。 ○眞言 唵引戸嚕戸嚕戰擊里、摩蹬者、娑婆訶

○又の印法界定印、左右の手共に仰け、左手を以て右手の背に付け 印の上に藥器有り、爲めに能
く衆生の病を除くと想へ。又想へ、此の鉢の中には十二大願妙藥有り、此の藥を以

て像法轉する時衆生一切の病を療治すと。○眞言 南無薄伽伐帝、鞞殺社寶嚩瑟
瑠璃野鉢喇婆、喝囉闍也、但佉揭多邪、阿囉喝帝三藐三勃陀邪、但姪陀、唵鞞殺逝鞞

殺社三沒揭帝、莎訶 以上本尊 〇日光菩薩の印明 二手五指を舒べ二頭指二大指端を合はせ
に開き舒ぶ、私に曰く、二中二無名二小の六指は 此の印を結び三度旋轉す。 唵唵褒爾庚多、

娑婆訶 〇(三)月光菩薩の印明 右手五指を舒べ、頭指と大指とを屈して端を合はせ、掌をして 曩莫、
三曼多沒馱南、戰捺羅波羅婆耶、娑婆訶 〇十二夜叉の印明 右の手金剛拳に作し指 曩

謨、囉但曩但羅夜耶、那謨金毗羅、和耆羅、弩佉羅、安陀羅、摩尼羅、素藍羅、因達
羅婆耶羅、摩休羅、眞持羅、照頭羅、毗伽羅、那謨、毗舍闍瞿流毗瑠璃耶、鉢羅頗囉

闍野、但姪他、唵毗舍旋毗舍闍、娑婆訶 〇又の説は印は前の如し、眞言 唵俱
毗羅、娑婆訶 〇正念誦呪 〇散念誦 佛眼、大日、本尊三種、日光、月光、 〇伴僧呪 根本

〇御加持呪 根本、或は十二神將(未) 〇勸請 十二淨願薄伽梵、 日光月光諸薩埵 〇
發願 十二大願 醫王薄伽 日光月光 十二神將 諸眷屬等。 〇禮佛

南無鞞殺社寶嚩瑟瑠璃野薩但耶曩多。 〇讚 先づ四智讚如し。 〇次に本尊讚 歸
命滿月界、淨妙瑠璃尊法藥救人天 因中十二願 慈悲弘誓廣願度諸含生 我

今申讚揚 志心頭而禮 〇護摩 (二) 増益に就て之を。 部主段 延命を以て部主と。 本尊段
自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持供物呪、 諸尊段 三十七尊。 世天段

十二神將之 〇道場莊嚴 〇支度 〇卷數。

〇〇七佛藥師法

〇佛眼法

〇種子室利 〇三昧耶、如意寶珠 〇道場觀 「樓閣の中に曼荼羅有り、内の紇里字

變じて三重八葉の蓮花と成る、中臺に室利字有り、變じて寶珠と成る、即ち本尊(三)縛

日羅室利と成る、身色(三)白月暉にして、二目微しく咲ひ、二手臍に住して、(三)奢摩他

國譯秘鈔卷一 四八七

(一)一切佛頂輪王
佛眼一字金輪なり
は隨蓮の尊なれば
金剛曼荼羅の前に
七曜あり
七佛の
所變なり
普賢著
の所變なり
大降三世
の所變なり
彌勒の
變所なり
師子の冠
地の速疾なる事
表す
五眼云云
下の註は常流には
用ひず

(八)又の印
一印の印なり
印尊勝陀羅尼の
塔印といふ

(二)金剛吉成就一切印
の二中指を押し
文を押せば中節
を押しなり
佛眼より生ずる
星の障りを除くは
白衣が其の根本な
り

(三)破諸宿曜の印
此れ破諸宿曜云云
り文殊の印なり
文殊は諸佛の師に
して佛母なれば佛
眼と同事なり

(四)秘中の秘
秘中に説き玉ふ故
に秘事なり
金剛印
は佛眼と隨途の尊
なれば且くも難
すなれば且くも難
輪の形なり
大日金輪なり

に入るが如し、一切支分、十恒河沙俱胝の佛前の一蓮花の上に一切佛頂輪王を出生す
手に八輻の金剛法輪を持し、次に右に旋つて七曜の使者を布き、次に第二の花院頂
輪王、前に金剛薩埵、文殊、虚空藏、轉法輪、觀世音、虚空庫、金剛拳、摧一切魔
等の八大菩薩、右に旋て安し各々本標幟を執る、第三の花院は前葉より右に旋つて、
步擲、降三、六足、大咲、大輪、馬頭、無能勝、不動等八大明王を安す、花院
の外の内四供、次に外四供、四方四攝等の使者、皆師子の冠を戴けり。○印真言
○根本の印 二手虚心合掌して、二頭指を屈して二中指の上の節に著け、二大指並べ立て、二中指の中節を押
次に左肩、次に右目、次に左目、次に眉間なり、即ち引して鼻上に至
る是れ眉間を押するの心なり、次に右旋して面を摩すること三返。
口傳に曰く、此の印を以て五眼に配するに、左の頭指中指の間に一眼、右の頭指中
指の間に一眼、二大指の間に一眼、二中指の間に一眼、二小指の間に一眼、是れ其
の五眼なり。

○真言 三返を誦しての後、五處等を印す五 娜謨 囉伽 縛底 臨瑟 泥 灑 野 一 唵 二 嚕 嚕 塞 上 普 嚕
三入縛羅四底瑟佗上悉駄路者爾五薩縛刺訖去 馱爾曳六莎縛去二訶 ○又の印 二心合掌
して、二頭指を屈して甲を合せ、二大指を並べ立て、
二頭指の側を押せ、此の印を以て五處を加持す。
○真言 唵 勃陀嚕者爾、娑婆訶

○金剛吉祥成就一切印 二手合掌し二小指内縛し二無名指を屈し二小指縛せしめ同より掌に入れて背を
べ立て二中指を押 し、初文を押せ ○真言 唵、縛日羅金剛室利佛眼摩訶也室利吉祥音 阿彌底也室利日素
摩室利囉央譚羅迦室利囉沒羅賀沙跋底室利囉戊羯羅室利囉舍爾始者羅始制帝室利囉
賀二摩曳室利、大普賢、吉 娑婆訶
師説に曰く、此の真言の前後は佛眼、中は七曜なり、是れ則ち攝伏七曜障難、速に
悉地を成ずるの意なり。

○破諸宿曜の印 二手内縛して、二大指を並べ置き ○真言 薩縛陀乞叉但羅宿三摩曳等
室扇曳 祥扇底迦羅 突戸嚕事 娑縛訶 ○成就一切の印 二手無名指を大指の間に指し入れ、左の
頭指中指を以て同じく右の小指 無名指を大指の間に指入れよ ○真言 唵 一吒引吒烏 二合置智置智吒烏 三合
吒烏引吒烏 短二縛日羅 二薩但縛 二合 惹吽 釁斛 六紇哩 二合 斛吽 泮吒 七吽 八

以上五種の印真言は、皆是れ本尊の印真言なり、或は説く、金剛吉祥、諸宿曜を破
し一切の印明を成願するは本尊の印明に非らず、只加へ用ふるのみと。支是れ偽説
なり、此の三種、本尊の印言を用ふるは、是れ秘中の秘なり。
○金輪印 根本の印なり、本尊の印明に非らず 二手内縛して、二中指を立て合せ、上の節を屈して釁
形の如くし二大指を並べ立て二頭指を屈して端を合せ

二大指の上

〇眞言一字

曇莫三曼多沒馱南、勃嚕吽 〇七曜惣印二手虚心合掌して二大指を並べ立て、僅き立つ

〇同じく惣呪

曇莫三曼多沒馱南、莫羅合クイソバ醴濕縛里ニヤ野、鉢羅合ニハ鉢多儒低羅摩耶、娑縛合ニ訶 〇八大菩薩惣印金剛合掌 〇同惣呪 曇莫三曼多沒馱南、吽、闍、怛洛、〇紇哩、唵、惡、郝、娑婆訶 〇八大明王惣印金剛合掌 〇同惣呪 曇莫三曼多沒馱南、虐、吽、紇哩、吽、吽、吽、吽、憾、娑縛訶 〇或は説く、七曜惣印言は前の如し、八大菩薩の所金剛手の印の印明を用ふ。 〇内五股の印如し曇莫三曼多沒馱南、吽。八大明王の所に、步擲明王の印明を用ふ。 金剛合掌、唵、紇哩、吒嚕吽、勃嚕吽、素嚕吽、惹嚕吽、虐、又た説く、八大明王の所には不動劔印を用ふ。 唵阿遮羅劔拏戰多薩陀野吽吽

問ふ、金剛手を以て八大菩薩の所に用ひ、步擲或は不動を以て八大明王の所に用ふるは、是れ彼の菩薩明王惣呪の意か、將た又何故なるか。答ふ、惣呪に非らず、以上首擲の下意なり。 〇又た説く 〇七曜各別の印眞言 △日曜 二手各々五指を舒べ、二頭二中二無名並べ掌の内に入れ、二無名指の本を押せ。 唵阿彌底耶室利、合娑迦訶 △月曜 左手五指を舒べ、少しく風し肩を通ぎ之想へ、右の手金剛拳 唵素麼室利、合娑婆賀 △火曜 右の手五指を舒べ大指を風して掌の内に作し腰に安す 唵素麼室利、合娑婆賀 △土曜 地鉢の印、禾

〇月曜 蓮花の中に伏見ありき觀す。

羅賀室利、合娑婆賀 △水曜 二手内縛して二頭指 唵沒馱室利、合娑婆賀 △木曜 地天鉢の印なり。 各々五指を舒べ、二頭二中二無名二小指皆側合して 唵沒羅賀沙摩合底室利、合娑婆賀 △金曜 二手内縛して、二中指を立て申べ右を以て 唵戌羯羅合室利、合娑婆賀 △土曜 地天鉢の印、禾

〇水曜 龍索の印なり。

〇〇八大菩薩の各別印明 △金剛手 内五股の印、二手内縛して二中指二大指二小指、各々立て 曇莫三曼多沒馱南、吽 △文殊 梵篋印、二手五指を舒べ、左仰け右覆 曇莫三曼多沒馱南、闍 △虚空藏 三昧耶會寶菩薩の印、二手外縛して二頭指を立て合は 曇莫三曼多沒馱南、怛洛 △轉法輪 小金剛輪の印、二手金剛拳に作り、二頭指二小指共に相係けて鉤結し印を以て 曇莫三曼多沒馱南、吽 心の上に安す、又本尊の像に觸れ、又虚空藏界を遍くして後口に收むべし。

〇〇八大云云此以下の眞言は皆種子の上に歸命の句を加へて成したるなり。

△觀音 八葉の印、二手虚心合掌して二 曇莫三曼多沒馱南、誦哩 △虚空庫 三昧耶界寶菩薩の印、二手外縛して二頭指を立て合 曇莫三曼多沒馱南、唵 △金剛拳 羯磨會寶菩薩の印、二手金剛拳に作り左の拳を仰け右の拳を覆せ、兩拳相ひ重れ、右を上にし左を下にし相ひ重れ著け其の隙有らしむる勿れ。 曇莫三曼多沒馱南、惡 △摧魔怨 普賢三昧耶の印、二手外縛し 曇莫三曼多沒馱南、迦 〇八大明王各印明 △步擲 金剛 唵紇哩吒嚕吽、勃嚕吽、素嚕吽、惹嚕吽、虐、△降三世 指開き立て、二頭指左右各々三度轉ぜよ。 唵彌蘇婆縛日羅吽吽

花合掌して十指を蓮
風し圓くするなり
上み下へ長くする
なり。

振鈴 常に振
鈴迄は佛眼なれど
も常に異なる。

大佛頂法之攝一切佛頂輪王名づ
○種子形 ○三昧耶形、八輻金輪
○道場觀 「虚空法界の中に、大金刚峯寶樓閣有り、高くして中邊無し、諸の妙寶を
以て莊嚴交飾す、無量百千の光明照耀す、其の中央に大蓮花王有り、花臺の上に心阿阿
の三字有り、七大師子王を作す、其の上に阿字有り大月輪と成る、輪變じて八輻の
金輪焰輪と成る、輪の形廣大にして三千世界に遍ねし、輪の脐中に於て白蓮花王有り
其の上に惡字有り變じて八輻金剛寶と成る、其の輪變じて攝一切佛頂輪王の身と成る
即ち大是れ如來形にして紫磨金色にして大丈夫の相なり、法界の定印に住し、其の印の
上に於て八輻輪を持す、其の攝佛頂輪の身より八色の光を放ち、大輪一一輪輻の間よ
り八方八色の金輪を出生す、其の八方輪脐に於て八種の蓮花を出生す、其の蓮花に於
て八佛頂輪王を出生す、即ち前の赤色花輪の中に勃嚕訶字有り、變じて如來頂印と成
る、印變じて光聚佛頂と成る、前右隅の黄色花輪の中に吒嚩訶字有り、變じて黄色の
蓮花と成る、蓮華變じて發生佛頂と成る、右邊の白色花輪の中に怛嚩訶字有り、變じ
て白傘蓋と成る、傘蓋變じて白傘蓋佛頂と成る、右後隅の雜色の花輪の中に訶嚩訶字
有り、變じて利劍と成る、利劍變じて勝佛頂と成る、後邊の紅色の花輪の中に忽嚩訶

△大威徳二手内縛して、二中

叫惡叫

大咲

四九二

の内に入れよ二無名指の中の節文を押し、二頭指、
二中指の前に於て圓く立て合はせ三度來去せ。

頭指二小指共に相保けて鉤結し、印を以て心の上に安す、
又本尊の像に觸れ、又虚空界に通して後、口に收めよ、
に、屈して掌の中に入れ甲を合す、二大指並
べ立て少しく屈し二頭指の側に著くる勿れ、
唵野訶里縛叫叫泮泮 唵無能勝二指圓く立
て合せよ。

唵戸魯魯戰拏里摩蹬者、娑婆賀 △不動
加持し、次に前の如く之を擲み、右を以て劍と爲
し左を以て鞘と爲す、此の如く之を觀すべし。

○散念誦 大日、本尊五種、金輪、七曜、八大
持呪根本 ○勸請 佛眼、佛母、大覺尊、三層八
大眷屬 ○禮佛 南無阿利耶沒駄嚩者爾、三
金剛薩埵讚誦す 縛曰羅薩但縛摩訶薩但縛曰羅薩縛但他藥多三曼多跋但羅縛曰羅

備耶縛曰羅波傳囊謨娑都帝 ○護摩 息災に就いて之を
自加持印明、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪。○諸尊段 七曜、八大菩薩、八大
供す。○世天段、○支度○卷數 以上卷一

國譯秘鈔卷二

○次

○發願 佛眼佛母 三層八葉 諸

○讚 先づ四智讚如し

○御加

○御加

字有り變じて除障佛頂と成る、左の後の隅の青色の花輪の中に室嚕咩字有り、變じて五股杵と成る、杵變じて廣生佛頂と成る、左邊の綠色の花輪の中に勃嚕呼有り、變じて八幅の金輪と成る、輪變じて最勝佛頂と成る、前の左の隅の紫色の花輪の中に素嚕咩字有り、變じて白螺と成る、白螺變じて無量聲佛頂と成る、次に大輪外の七寶圍繞す、佛前を始めと爲し、次に輪、珠、女、馬、象、藏、兵の如きなり、此の七寶の次第は攝眼毒鈔に依れり。次に虚空藏等の八大菩薩圍繞し、次に大咲等の八大明王圍繞せり。」

○印真言 (一) 智拳印 大師御 二手拳に作し左の頭指を立て伸べ、右の拳を以て之を握れ (二) 大陀羅尼 事繁なるに依つて之を 或は略す時小呪を用ふり、之を以て小呪と爲す 但爾也 他、唵、阿、曩、曩、引、阿、曩、曩、引、尾、舍、娜、尾、舍、娜、滿、馱、滿、馱、滿、引、馱、爾、滿、馱、爾、吠、引、羅、縛、日、羅、合、播、泥、泮、吒、引、跋、唎、泮、吒、合、賀、(三) 根本大印 又は一字心密 二手虚心合掌 風し甲を合はせ二大指を並べ立て二頭指の側を押せ。 ○秘密一字心真言 曩莫三曼多沒馱南惡 ○攝一切佛頂 輪王本三昧耶の印 二手合掌して、根十指各々小鉤にして散し 立て、十指皆著くること無く障有らしめよ。

(一) 智拳印 大師御 二手拳に作し左の頭指を立て伸べ、右の拳を以て之を握れ (二) 大陀羅尼 事繁なるに依つて之を 或は略す時小呪を用ふり、之を以て小呪と爲す 但爾也 他、唵、阿、曩、曩、引、阿、曩、曩、引、尾、舍、娜、尾、舍、娜、滿、馱、滿、馱、滿、引、馱、爾、滿、馱、爾、吠、引、羅、縛、日、羅、合、播、泥、泮、吒、引、跋、唎、泮、吒、合、賀、(三) 根本大印 又は一字心密 二手虚心合掌 風し甲を合はせ二大指を並べ立て二頭指の側を押せ。 ○秘密一字心真言 曩莫三曼多沒馱南惡 ○攝一切佛頂 輪王本三昧耶の印 二手合掌して、根十指各々小鉤にして散し 立て、十指皆著くること無く障有らしめよ。

口傳に曰く、十指の上に次第觀じて十字真言を置く、左の大指の上に惡字を觀じ、同頭指の上に但嚕咩字を觀じ、同中指の上に吒嚕咩字を觀じ、同無名指の上に咄嚕咩字を觀じ、同小指の上に訥嚕咩字を觀じ、右の小指の上に忽嚕咩字を觀じ、同無名指の上に室嚕咩字を觀じ、同中指の上に勃嚕咩字を觀じ、同頭指の上に素嚕咩字を觀じ、同大指の上に吒字を觀ず、此の如く十指の上に右に繞つて十字を觀じ置くべきなり。

○金剛熾盛光明佛頂輪王自在十字真言に曰く、曩謨引尾切引嚕引 左曩野、曩謨引婆去 譏縛觀引烏瑟尼合 灑野、洞、引、但嚕咩、合、吒嚕咩、合、咄嚕咩、合、訥嚕咩、合、忽嚕咩、合、室嚕咩、合、勃嚕咩、合、素嚕咩、合、沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱 以上本尊の印真言なり

○八大佛頂の印真言に之れ有り、又一字頂輪念誦儀軌 △光聚佛頂 二手内縛して二中指を立て合はせ、二頭指を屈して中指の上に二大指を並べ立てて、二中指の中の節文を押せ。私曰く、内三股の印なり、但し二頭を以て 或説には内三股の印を用ふとあり、曩莫三曼多沒馱南、但陵合 帝儒羅施、烏瑟尼合 灑、娑縛賀 △發生佛頂 八葉の印 曩莫三曼多沒馱南、輪嚕咩、烏瑟尼合 灑、莎呵 △白傘蓋佛頂 右の手拳に作し頭指を直く申べ立て、左の手五指を舒べて其の上を覆ふ 右の頭指左の掌の内に附けよ。 曩莫三曼多沒

馱南、嚙、悉怛多鉢但羅合、烏瑟尼灑、娑縛訶、△勝佛頂、大惠刀の印、合掌して

二頭指の中節を屈し端を合せ相ひ柱へ、二頭指を並べ立て二頭の側を押せ。 曩莫三曼多沒馱南、苦惹欲、烏瑟尼灑、莎呵、△

除障佛頂、二手内縛して、右の頭指を立て申べ相餉せよ。 曩莫三曼多沒馱南、訶唎、合尊枳羅拏半祖、烏瑟尼

合灑、娑縛訶、△黄色佛頂内五股の印。二手内縛して、二中指二大指二小指各々直ぐ立て

曼多沒馱南、吒嚕呬、烏瑟尼合灑、莎呵、△最勝佛頂、轉法輪の印、二手五指を

合せ、二頭二中指二小指各々之を組み合はせ左の大指を以て右の掌の内に置き、右の大指と端とを合せよ。

二灑、娑縛訶、△無邊音聲佛頂、二手虚心合掌して、二大指を並べ立て二中指の中の節文

曼多沒馱南、呬惹欲、烏瑟尼合灑、莎呵、を押し、二頭指を屈して二大指を覆せ皆相之を纏めよ。 曩莫三

○八大菩薩の印言、△虚空藏、二手虚心合掌して、二大指並べて掌の内に入れ、二無名指の中

曩謨、阿迦遮迦羅縛耶、唵阿哩迦摩哩沒哩、娑縛訶、△普賢、二手外縛して、二

中指を立て合はせよ。唵三昧耶、薩怛𑖀、△金剛手、二手内縛して、二中指二大指二

して、二中指の背に立てよ。 曩莫、三曼多縛曰羅曇、戰拏摩訶嚕娑陀、呬、△文殊、二手内縛して、二中指二大指二

所謂内五股の印なり。 二手虚心合掌して、二大指を並べ立て、二中指の中節を屈して端を合はせ、二大指の甲の上に置き、二中指を以て二無名指の背に附けて相纏めよ。 唵阿羅波灑曇、△除蓋障

二手虚心合掌して、二頭二中指各々直ぐ立て合はせ、二無名二小指共屈して掌に入れ背を合はせ、二大指を並べ立て、二無名の中節を押せ。 歸命、惡薩怛縛絲多弊囉曇、

多、但藍但藍嚙嚙、娑縛訶、△地藏、内縛して、二中立て散す、唵訶訶訶、尾娑摩

曳、娑縛賀、△觀音、二手外縛して、二頭指直ぐ立て合せ 唵阿嚕哩迦、娑縛訶、△慈氏

二手虚心合掌して、二頭指を屈し甲を合はせ、二大指を並べ立て、二頭指の側を押せ。 歸命、唵梅怛梨耶、娑縛訶

○八大明王の印言、△大唎、右の手、小指を屈し大指を以て小指の甲を押し、餘の三指直ぐ立て各々著くることなく隙有らし

めよ。左の手の頭指大指相捻して、餘の三指直ぐ立て所謂持花の印なり、左右此の印に作し、

兩印之を相ひ對立せよ。 唵縛曰吒、訶娑耶呬發吒、△步擲、右の手小指を屈し、大指を以て小指の甲を

右共に此の印に作し相ひ對立せよ。 唵紇哩呬、矩嚕呬、勃嚕給、素嚕呬惹嚕給、虐、△降三世、二手拳に

合せ、二小指を相ひ懸け二頭指を開き立て、左右各々轉せよ。 唵蘇婆備蘇婆呬、縛曰羅呬發吒、△大威徳、内縛して、

二中指を立て合はす。唵呬惡呬、△不動、左右劔印に作し、右の頭指中指を以て左の大指、無

して順逆加持す、次に前の如く之を挿み右を以て劔を爲し、 唵阿左羅羯拏、戰拏娑馱耶、呬發吒

△無能勝、右の手の頭指大指相ひ捻し、餘の三指直ぐ立つ、所謂持花の印なり、但し火を屈し 唵炬嚕炬

嚕、戰拏哩、摩登擬、娑縛訶、△馬頭、二手虚心合掌して、二頭指を屈し甲を合は

野紇里縛、呬呬發吒、△大輪、二手金剛拳に作し、二頭指二小指共に鉤結し之を三反へせ。 唵縛曰羅、斫羯羅呬

○普通佛頂の印真言、二手虚心合掌して、十指深く交へよ、金剛合掌の如し、但し金剛合

掌は十指をこして淺く交へし

を略す。

を略す。

を略す。

を略す。

を略す。

を略す。

△二大指云云、甲の上とあれども端相捻する迄なり。常の無所不至の如し。

△馬頭、二無名指の事なきも二無名指も屈して甲を合すなり。二無名指の事なきも二無名指も屈して甲を合すなり。

此の印眞言は天變
惡星の現する時此
の法を修するに此
の印明を結するに
に宜し又假へ行
の行ぜざるも此
の印明計り結し
て宜し。

む、此の印は深く交ふるなり、
十指皆交ゆ甲の節の程なり。
訖羅、合執舌底唵、吽。引 ○(二)星宿等難を爲る時に眞言を用ふべし 熾盛光儀軌に
は之を熾盛光佛頂の眞言と名づく、印に於ては三股の印を用ふ、被甲護身の印の如し。
熾盛光法 曩莫三曼多重沒駄喃、阿鉢羅合底賀多、上捨娑曩南、引唵引法法法、法法
吽吽入縛合羅入縛合羅鉢羅合入縛合羅、鉢羅合入縛合羅底瑟姪合底瑟吒、合瑟置吒合
娑縛合吒娑頗合吒、娑縛合訶。師説には娑頗吒の上に屬 此の眞言は、又大日劔印、威徳
光明軌等に出づ、各々小分異有れども、大旨は同なり、除災救令軌は之に同じ。○正
念誦の眞言 婀、但嚕咩、吒嚕咩、咄嚕咩、訥嚕咩、忽嚕咩、室嚕咩、勃嚕咩、素
嚕咩、吽 攝眼毒女に之を出す。私曰く、金剛熾盛光明佛 頂輪王自在十字眞言の内、要を取りたるが。 或は祕密一字心眞言を用ふ。或は大
佛頂小呪を用ふ。 但爾也他唵阿 彌阿彌阿彌等 ○散念誦 佛眼、大日、陀羅尼、辨事 不動大金剛輪、一字。 ○伴僧呪 大陀 羅尼 ○御加持呪
大佛頂 小呪 ○勸請 金剛佛頂轉輪王、八大佛頂諸轉輪 ○發願 金剛佛頂 八
大佛頂 諸轉輪王 ○禮佛
南無、翳迦乞叉羅沒駄、郎瑟尼灑。返南無、帝儒羅施、郎瑟尼灑、薩但他藥多。以下八
々一 南無、輒嚕吽、郎瑟尼灑、薩但他藥多。 南無、悉但多、鉢但羅、郎瑟尼灑

薩但他藥多。 南無、惹野、郎瑟尼灑、薩但他藥多。 南無、尾枳羅擊半祖、郎瑟尼
灑、薩但他藥多。 南無、吒嚕吽、郎瑟尼灑、薩但他藥多。 南無、尾惹野、郎瑟尼
灑、薩但他藥多。 南無、吽惹欲、郎瑟尼灑、薩但他藥多。 ○讚 先づ四智讚 常如し
次に不動讚 曩麼薩縛沒駄母地薩但縛南、薩縛但羅、僧虞素彌多、鼻惹羅始吠、曩麼
娑都帝、娑縛訶 ○護摩 敬愛に就いて之を修す、 或は息災、或は調伏。 ○部主段 佛眼を以て部主と爲す。
○本尊段加持印明より、召請印明 印明共に 大鈎召 ○撥遣印明 小呪の末に藥車等の句を 加へ彈指すること一度。 ○諸供物呪
○加持物呪 ○諸尊段○世天段 ○壇場の莊嚴 大壇護摩壇之を辨備す、壇
場の支分常の如し、聖天、十二天の兩壇之れ無し、或は又別に護摩壇を用ひず、只常
の如く小御修法之を行す、或は説く、十六枚の鏡を以つて壇上に置く、但し二傳には
之を用ひず。云○注進 大佛頂御修法一七箇日支度事
合。 五色の糸各々三丈五尺 兩壇の料 各一筋 蘇 蜜 名香 白檀 沈水 薫陸
爵金 甘松
五寶。 黄金 白銀 眞珠 瑠璃 琥珀
五藥。 赤箭 人參 茯苓 石菖蒲 天門冬

(二) 又の印 今は五處加持をなす。

(三) 唯阿密云云 又は小呪ともいふ (三) 七佛頂 尊勝の別徳化身なり。

五〇四

て、二頭指を側を押し、
彈指の勢の如くせよ。 ○眞言 尊勝陀羅尼 ○(二) 又の印 智拳印 二手金剛拳に作り、
て之を握れ。 ○眞言 同陀羅尼 ○又の印 除障佛頂の印 二手内縛して、右
の頭指を立て、相
ひ合 ○眞言 曩莫三曼多沒馱南 訶嚩吽、尾枳羅拏半祖、烏瑟尼灑、娑縛訶

○正念誦 (三) 唯阿密利多帝惹縛底 ○散念誦 佛眼、大日、尊勝陀羅尼小呪、(三) 七
娑婆訶、此の明を用ふ。 ○御加持呪上 ○勸請 尊勝佛頂轉輪王、八大佛頂諸轉輪 ○發願 尊勝佛
頂 八大佛頂 諸、 ○禮佛 南無摩訶毗盧舍那佛 南無、 南無
四攝智菩薩 南無怛隸嚩迦、烏瑟尼沙、薩怛他葉多返 南無悉多他半怛羅、烏瑟尼
沙、薩怛他葉多 南無惹野、烏瑟尼沙、薩怛他葉多 南無惹野、烏瑟尼沙、薩怛
他葉多 南無尾惹野、烏瑟尼沙、薩怛他葉多 南無帝儒羅施、烏瑟尼沙、薩怛他
葉多 南無尾枳羅拏半祖、烏瑟尼沙、薩怛他葉多、南無吒嚩吽、烏瑟尼沙、薩怛他
葉多 南無輪嚩吽、烏瑟尼沙、薩怛他葉多 南無吽惹欲、烏瑟尼沙、薩怛他葉多
南無金剛界、 南無大悲胎藏界、 之無し ○讚 先づ四智讚如し
次に不動讚 ○護摩 息災に就いて之を 〇部主段 金輪を以て部主と
持印明 召請印明 撥遣印明 諸供物呪 加持物呪 ○諸尊段 三十七尊之

持印明 召請印明 撥遣印明 諸供物呪 加持物呪 ○諸尊段 三十七尊之

世天段 ○支度 ○卷數

〇〇〇 如法尊勝法

以上卷二

國譯秘鈔卷三

〇〇〇 光明眞言法 十八道に就いて此の法を修す、又胎藏曼荼羅を懸く、其の前に於て之を行す。

○本尊 胎藏大日 ○(三) 種子 〇三昧耶形 塔 ○道場觀 「心の上に惡字有

り、變じて光明心殿と成る、其の中に紇里字有り、大蓮花王と成る、臺の上に阿字有
り變じて八葉の蓮花と成る、上に惡字アハク此字五色 有り、五色の光明を放ち字變じて五輪塔
と成る、五輪より各々光を放つ、即ち五色の光明なり、塔變じて大日如來と成る、法
界の定印に住し、五智の寶冠を戴き、結跏趺坐して正受到住す、身より五色の光明
を放ち、遍く法界の衆生を照す、上み有頂より下も無間に至るまで、此の光明に遇ふ
者は皆苦を離れ樂を得、四智四行無量の佛菩薩聖衆、前後に圍繞せり。 ○印 外五
股の印 〇眞言 五字 〇眞言の明阿尾羅吽欠 〇五色光

國譯秘鈔卷三

五〇五

(二) 如法尊勝 計なるが故に題 法に三ヶの秘法あ 大五箇の秘法あ 仁王經、孔雀經、請 兩法は轉法輪七 秘法は元如實尊勝 如實愛染なり。 法は光明眞言此の 掛けて何れを本尊 胎藏大日此の方は 實に此の註書とは 爲す大書を修は 十八道に就いて修 する義を出せり。 具足の惡字に五點 五點より五色の光 明を放つと觀ず。 〇眞言の明阿尾羅 〇眞言の明阿尾羅 〇眞言の明阿尾羅

法は四種に修す、一は福徳に益す、二は延命力に益す、三は地増益に益す、四は悉命増益に益す、今此の尊像に二方あり、一は二頭、二は四頭、白象は之れを對治するに苦す。

滿月童子の如し、二十臂を具して、十六尊並に四攝三摩形標幟を執持す。○印二手金剛拳に作り、二頭指仰け並べ相ひ係けて鉤結して心に當てよ。○眞言、唵縛縛曰羅欲或る傳は元果の傳なり。

○種子 欲 ○三昧耶形 甲冑 ○道場觀 「須彌山の頂に惡字有り、變じて七寶の宮殿と成る、其の中に絃里字有り變じて八葉の蓮花と成る、蓮花の上に五千の群象有り、一大金剛輪を成す、其の輪の上に四つの哦字有り四大象と成る、鼻を以て獨股杵を卷き、各々六牙を具ふ、其の象外方に向て立つ、象の頂に次の如く四大天王有り、誓て世界を護る、其の象の上に絃里字有り、千葉の大寶花王と成る、其の上に阿字有り圓明淨月輪と成る、輪の上に欲字有り、變じて金剛甲冑と成る、甲冑轉じて三世常住金剛壽命薩埵智身と成る、其の形三滿月童子の如し、身黄金色にして五佛寶冠を戴く、身より百寶光を放ち、光の外に白月輪有り、二十臂を具して、十六尊並に四攝三摩形標幟を執持す。」○印二手金剛拳に作り、二頭指仰け並べ相ひ係けて鉤結して心に當てよ。○眞言、唵縛縛曰羅欲或る傳は元果の傳なり。

圓行傳之の用ひず。

指の間に入れよ。」文

唵摩訶蘇薛縛曰羅薩駄耶、薩縛薩但吠、瓢、弱吽餞斛

圓行傳の印明。二手外縛して、二大指 吽」 ○正念誦唵縛縛曰羅薩駄耶、薩縛薩但吠、瓢、弱吽餞斛 ○散念誦佛

大日、本尊、降三世、執金剛、四天王經、大金、一字。 ○伴僧半分念誦 金剛智譯壽命經 ○御加持呪降三世 ○勸請

普賢延命大薩埵、金剛部中諸聖衆。 ○發願 三世常住 普賢延命 諸大薩埵 ○禮佛 南無阿利 耶縛曰羅

目法三昧耶胃地薩埵摩訶薩但縛三返 ○讚 先づ四智讚常の如し 次に本尊讚 唵縛縛曰羅二羅三羅四羅五羅六羅七羅八羅九羅十羅十一羅十二羅十三羅十四羅十五羅十六羅十七羅十八羅十九羅二十羅二十一羅二十二羅二十三羅二十四羅二十五羅二十六羅二十七羅二十八羅二十九羅三十羅三十一羅三十二羅三十三羅三十四羅三十五羅三十六羅三十七羅三十八羅三十九羅四十羅四十一羅四十二羅四十三羅四十四羅四十五羅四十六羅四十七羅四十八羅四十九羅五十羅五十一羅五十二羅五十三羅五十四羅五十五羅五十六羅五十七羅五十八羅五十九羅六十羅六十一羅六十二羅六十三羅六十四羅六十五羅六十六羅六十七羅六十八羅六十九羅七十羅七十一羅七十二羅七十三羅七十四羅七十五羅七十六羅七十七羅七十八羅七十九羅八十羅八十一羅八十二羅八十三羅八十四羅八十五羅八十六羅八十七羅八十八羅八十九羅九十羅九十一羅九十二羅九十三羅九十四羅九十五羅九十六羅九十七羅九十八羅九十九羅一百

燥契耶、大安樂、縛曰羅二瑜勢、摩訶瑜勢、壽命、縛曰羅二惹爾多、摩訶惹爾多、命、縛曰羅二毗瑜、摩訶毘耶、不老不死の義、唵砧欲、曩謨率都帝。

右の讚は是れ傳法阿闍梨深く之を祕する故に、錄に載せず儀軌に出でざるなり、○

或る説にては、先づ四智、次に金剛薩埵讚」文 照に曰く ○護摩増益に就く ○部主三

世を以て部主と爲す、或る説には、無量壽如來。 ○本尊段 加持印明より召請印明 撥遣印明、諸供物呪、

加持物呪。 ○諸尊段三十七尊 之を請す。世天段加執金剛 四天王 ○壇場莊嚴 先づ御聽聞所の方に於

て、大壇を建て大壇の左邊に護摩壇を立つ 近來御所の便宜に隨て 或は右邊に之を建つ。 次に十二天壇、次に聖

天壇之を建つ、各壇の上の支分常の大法の如し、但し大壇の上に經宮之を安せず、又

中央の火舎之を用ひず、大壇と護摩壇との間に七層の輪燈を建て、四十九燈を燃す、

△二大獨股の印
箭の印なり、此の
印を以て二乗の心
を射るなり。

△二手云云
二
拳合して右へ引き
分くるなり。

二小指を合せ開き
立て属くる勿れ。

○眞言

唵縛曰羅、薩但縛、弱畔鏝斛

○次に△大獨股の印二

外縛して、二中指掌に入れ面を合はせ

○眞言

唵摩訶蘇佉、縛曰縛薩但縛、弱畔鏝斛、

蘇羅多薩但鏝。○次に五尊羯磨印明

○眞言

△金剛薩埵大智印 左手、金剛拳に作し左の腕に安し、
右の手掌を舒べて小しく屈し又大

指を屈し掌内に置き此の印を結んで
金剛杵を抽擲する勢の如くせよ。

眞言

縛曰羅二薩但縛合 △欲金剛二印 二手拳に作し右
拳を以つて射る

勢の如く

眞言

薩縛引弩羅引誑、素佉薩但摩合曩娑。△計里計羅 二手金剛拳に作し、
右左を押し腕を交へ

よ

眞言

薩但鏝、二縛曰羅二薩但縛二跛羅莫、素羅多入 △愛金剛印 二手金剛拳に作
手の肘を承げよ。

各々左右の腕に安し、頭を
して少しく左に傾けよ。

眞言

跛鞞切 悉地左合 左擢虞鉢羅合曩多入 ○次に五尊三

摩耶印明

眞言

△金剛薩埵三昧印 二手外縛して、二中指を屈して掌の内に入れ
羅多薩但梵合 △欲金剛印 前の金剛薩埵の印の如し、但し二小指二無名指直く立て

羅多薩但梵合

眞言

△計里計羅印 前の慈金剛の印の如し、但し二大指
曰羅二涅哩合 瑟知二沙野計摩吒 △計里計羅印 右を上にして左を下にして相ひ交へよ。

端二頭指の端を
を相ひ合はせよ。

眞言

鏝、縛曰羅二合 迦引冥、濕縛二里但噴引 ○正念誦唵 ○

觸れ、次に左の
股に觸れよ。

眞言

斛、縛曰羅、二迦引冥、濕縛二里但噴引 ○正念誦唵 ○

散念誦 佛眼、大日、本尊二種眞言。唵縛曰羅薩但縛云云一唵

眞言

○伴僧呪唵 ○御加持呪同 ○勸請

本尊金剛大薩埵、四種妙妃諸眷屬

○發願

金剛薩埵 欲觸愛慢 諸、

○禮佛

眞言

南無阿利耶、因捺里縛曰羅 南無阿利耶、計里計

羅縛曰羅

眞言

南無阿利耶、囉誑縛曰羅 南無阿利耶、摩禮縛曰羅 以上中院傳には、阿利耶之

南無阿利耶、遮羅曩多尾爾也囉惹

眞言

縛曰羅蘇婆備 縛曰羅軍荼利 縛曰羅焰

曼德迦

眞言

縛曰羅夜叉 ○讚 先づ四智常の如し ○次に金剛薩埵 縛曰薩但縛、

摩訶但縛、縛曰羅薩縛、但他曩多、三曼多、跛但羅、縛曰羅備耶、縛曰羅波傳。曩誑

眞言

自加持印明、召

娑都帝

眞言

○護摩之修す。部主段 金剛界大日を以 本尊段 自加持印明、召

請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪、唵蘇誑、娑婆訶

眞言

○諸尊段 三十七尊 諸尊段之を請す。世天

段 ○支度 ○卷數

眞言

或る説 ○種子呼單 ○三形獨股 ○尊形 金剛薩埵一尊之を以て本 尊と爲す。口傳に曰く、金剛薩埵

一體許りを觀す、此の尊は餘の四尊の徳を具せしむるなり、源運寺流は之を以て祕傳

眞言

なりと稱す、然れども未だ説く所を見ず云云 或は曰く ○種子、唵摩訶蘇哦 ○三昧

耶形、五股 又曰く 願照 ○種子、薩但鏝 三形、五股。

眞言

國譯秘鈔卷九

五二三

(二) 鑿呼云云此
の呪は金剛界なり
若し胎藏界に從へ
ば五阿か又はチン
パザラアラタンナ
ウナリ。

如し、但し二頭指二無名指右を以つて左を押し交へ立て、此の印を結ん
で頂の左に置き、三大指前の如く外縛し、二中指實形に同じくせよ。

唵縛曰羅、囉但曇、惡、娑

婆訶 ○次に金剛吉祥の印明 ○次に破宿曜障の印明

○惣呪又様 如し 唵縛曰羅

囉但曇、阿阿暗惡、惡娑婆訶印なり

○正念誦呪 唵縛曰羅、囉但曇、(二) 鑿呼但洛訶里

惡 ○散念誦 佛眼、大日、本尊惣呪、同各別真言、八字文殊、金剛吉

○伴僧呪 胎藏虚空藏院真言、唵ア

ヤタ、ピシツタラン。バラダラソハカ。口傳

○御加持呪 胎藏虚空藏院呪同、じく

○勸請 本尊

五大虚空藏、七曜星宿諸眷屬

○發願 五大虚空藏、七曜星宿、諸大眷屬 ○

禮佛 曇謨、達摩駄都、薩迦除孽婆、胃地薩但縛、摩訶薩但縛。 曇謨、縛曰羅薩

迦除孽娑、胃地薩但縛、摩訶薩但縛。 曇莫囉但曇、阿迦除孽婆、胃地薩但縛、摩訶薩

但縛。 曇謨、跋納麼、阿迦除孽婆、胃地薩但縛、摩訶薩但縛。 曇謨、羯磨提縛、

阿迦除孽婆、胃地薩但縛、摩訶薩但縛。 ○讚 先づ四智常如し 次に寶菩薩 縛曰羅

囉但那、蘇縛曰羅、羅他、縛曰羅迦除、摩賀摩尼、阿迦除孽婆、縛曰羅茶、縛曰羅藥

婆、那謨娑都帝 ○護摩 天變性異を祈る爲めには、息災に就いて之を修し、 部主段 息災の時

て部主を爲し、増益の時、 本尊段 自加持印明 内五股の印、但し中指は實形にす、是れ五尊惣印な

り 實生を以て部主を爲す。 召請印明 外五股の印、但し 撥遣印明 印明は召請 諸供物呪 惣呪前

り 呪な 召請印明 中指は實形なり。 撥遣印明 印明は召請 諸供物呪 惣呪前 加持物

呪上

○諸尊段 三十七尊

○世天段 常の如く之を行す。但し七曜星

口傳に曰く、藥種に於ては、眞珠、若くは五寶を合はせ以て之を用ふ 口決に曰く、燒く

て如意寶珠と 観せよ。云云 ○壇場莊嚴 佛舍利(二)五粒、或は一粒、塔中に納め、彼の塔を以て經

箱に入れ、壇の上に安置す、自餘の事は常の如し。 注進 五大虚空藏御修法一

七箇日支度事

合 蘇 蜜 名香 白檀

五寶 金、銀、瑠璃、水精、眞珠。 五香 沈、白檀、龍腦、薰陸、安息。

五藥 白朮、人參、甘草、遠志、荷朮。 五穀 稻、大麥、小麥、菜豆、胡麻

大壇、一護摩壇、一面、爐、燈臺、八脇机、四禮盤、脚、二半疊、二壇敷布、二佛具覆布、二大慢、帖

闕伽桶、二口杓、長櫃、二桶、三口、其の内足桶、壇供米、十五御明油、八升阿闍梨、伴僧、口承仕、二

驅仕、人見丁、人淨衣、色、右注進如件 年月日 行事

五大虚空藏御修法所。 奉供 大壇供 護摩共 諸神供 奉念 佛眼眞

言、大日眞言、本尊眞言 同眞言、延命眞言、金剛吉祥明、破宿曜障明、成就一切明

軍荼利眞言、大金剛輪眞言、一字金輪眞言

(二) 五粒 五粒は
金剛界の五智、一
粒は普門の惣體な
り。

(一)阿闍梨阿闍梨は東方金剛部の主なる故に普賢阿闍梨親近の故に金剛薩埵は普賢と同體異名の故に降三世は東方の教令輪の故なり。

(二)文殊法 此法は諸文殊に通ず。書篋般若智惠なり。

- 又印 外五股の印。二手外縛して、二中指二大指二小指各々立て合せ、二頭指を屈し、二中指の背に立つ。
- 眞言 唵三滿多、婆陀羅野惡。
- 又印 胎藏一切支分生印。二手虛心合掌して、相並べ二大指仰け立つ。
- 散念誦 佛眼、大日、(一)阿闍、本尊、金薩、降三世、大金剛輪、一字。
- 伴僧呪なし
- 御加持同上
- 勸請 普賢菩薩大薩埵、金剛部中諸聖衆、
- 發願 普賢大士 金剛部中諸尊聖衆
- 禮佛 曩謨、阿利耶三曼多、婆陀羅、胃地薩恒縛返
- 讚四
- 護摩 息災に就て。部主 金界 大日 本尊段 加持印明より、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪。
- 諸尊段之を請す
- 世天段
- 支度
- 卷數

○〇〇〇文殊法 ○種子 暗

○道場觀 「壇上に阿字あり淨月輪と成る、月輪中に暗字あり變じて書篋と成る、篋變じて文殊師利菩薩となる、首に五佛の寶冠を著け、後に圓明月輪あり、師子の背に乘じ蓮花臺の鞍に坐す、愆怡微咲衆生を愍念あるの形なり、左に那羅延有て四種の標幟を持し、右に金翅鳥王有りて、恐怖す可き形を作す、及び無盡惠菩薩、善哉童子、須菩提等、恭敬侍立ち。」

○根本の印 二手虛心合掌して、二中指を以て二無名指の背に屬し、二大指を並べ立て、二頭指を屈め二大指の上に置く。

(一)種子 眞言の終字なり。

(二)根本印 三摩耶會の金剛利菩薩の印なり。

- 眞言 唵阿羅跋者娜。○正念誦 五字 眞言 ○散念誦 佛眼、大日、本尊、八字文殊、白衣、馬頭、大威德、一字。
- 伴僧呪 若らば 五字眞言 ○御加持呪同上
- 勸請 文殊師利大聖尊、蓮花部中 諸の聖衆 ○發願 大聖文殊 蓮花部中 諸大眷屬 ○禮佛 南無阿利也、曼殊師利返
- 讚四 ○護摩 部主 馬頭を以て部主と爲す。本尊段 加持より、召請、撥遣、供物、加持物、諸尊段之を請す
- 世天段 ○支度 ○卷數。

○〇〇五字文殊法 ○種子 曇 ○三昧耶形、劔 ○道場觀 「觀想せよ、寶樓閣中に白玉壇あり、其の上に師子座あり、座上に淨月輪あり、輪中に絃里の字あり

變じて七寶莊嚴の花座と成る、座上に曇字あり威光法界を遍照す、字變じて智劔となり、劔變じて文殊師利菩薩となる、身爵金色にして三十二相八十種好を具す、頂に五髻ありて種々の瓔珞其の身を莊嚴す、右手に智劔を持し、左手に青蓮花を持す、花上に般若梵篋あり、菩薩の身光明を放て樓閣の内外を照曜す、光に照さるゝ處、文殊法門にして、眷屬無量諸尊圍繞したまへり。」

○印眞言 根本の印 二手外縛して、二中指を立て合せ、上節を屈し、劔形の如く

○眞言 唵耨伽泐去 娜曇 ○五字眞言の如し 阿羅跋者娜 ○五髻の印 密

- 勸請 三世覺母大聖尊、入大童子諸眷屬。 ○發願 八子文殊 八大童子
- 諸眷屬等。 ○禮佛 南無阿利也、曼殊子利三
- 讚四 ○護摩息災に就て之を修す。
- 部主馬頭を以て部主となす。 ○本尊段 加持より、召請、撥遣、諸供物八字眞言 加持物
- 諸尊段八大童子四大明王 ○世天段 ○支度 ○卷數

○八字文殊鎮

師傳に曰く、板を以て月輪を造り胡粉を塗り、月輪の中央に本尊種子を書き、其の廻に八字眞言を書く圖は左にあり彼の月輪を以て青袋に入る、又箱中に納めて壇上に安き、修法了て後其の家の梁の上に之を納む、此の鎮は神人家を借る事等出來の時之行ふべし。云々。

- 月輪の圖之を ○大聖文殊鎮家法 梵本の字を以て青紙中に書き記す、種子の巡は眞言なり、寢殿中の梁の上に白檀の宮に入れて之を安すべし今鎮とは、此の文意なり。
- 彌勒法 ○種子 阿 ○三昧耶形 ○塔 ○道場觀 「須彌山上に紇里の字あり、即ち八葉の蓮花と成る、花上に阿字あり、變じて光明廣大七寶宮殿となる

○八字文殊鎮
是れ古宅の鎮に非
ず、邪主之れあり
て崇を爲す時之を
修す。

○塔 五輪の塔
なり。

○法界塔の印
印にあらす三形な
り、五輪の塔なり
此の中には舍利あり
○風幢 頭持なり
○不動云云 不動
と降三世は兩部
不二の義なり。

○印 無所不至
印を用ふる甚深なり。

其の中に一大圓明あり、此の上に更に九圓明有て金剛を以て道を界ふ、其の中央の圓明内に阿字有て法界塔と成る、塔轉じて慈氏菩薩と成る、身色白肉山に五佛の冠を戴き、左手に紅蓮花を執る、蓮花上に○法界塔の印あり、右手の大姆指火指の甲上を押し、餘指散し舒べて微しく○風幢を屈し、寶蓮花上に於て結跏趺坐す、種種の瓔珞天衣白帶を以て其の身を莊嚴せり、八圓明中に於て、四佛四波蜜内院の四隅に嬉鬘歌舞次第二院、香花燈塗鈎索鎖鈴第三重、八方天、大圓明の下に安座す、左に○不動尊あり、右に降三世あり、上に寶蓋有て兩邊に六箇の飛天あり、香花等を以て佛上に散す。

○印 二手合掌して、二風扇して甲相ひ合せ、二大を以て之を押す文口脣に曰く、前印を用ひず、無所不至の印も並べ立て、二中指の中節の文を押す。 ○眞言 唵梅但梨耶阿、娑縛訶。 ○又印 胎藏八葉中の印なり、二手金剛に上左に三旋す。 ○眞言 曩莫三曼多沒馱南、摩訶瑜譚瑜祇尼、瑜契濕縛里、欠若里計、娑婆訶。 ○又印 如來身會の印。二手虚心合掌して、二頭指を屈し

○眞言 納華摩滿多羅駄引脯、退轉單耽耶、薩縛合薩但縛引捨也、拏藥多、娑婆訶。 ○正念誦 大悲三昧の呪なり。即ち前當來の化主慈氏尊、内院の諸聖衆を都率す。 ○發願 彌勒慈尊 都率天上

(二) 禮佛 漢語なりとも梵語なりとも意に任す。

諸眷屬等。 ○(二) 禮佛 ○讚先づ四智 ○次彌勒讚慈氏二卷軌に出づ、即 迦上芥擻慕法、上 迦芥擻磨引左曩、迦芥擻引薩曩、平 迦芥擻訶薩路、合 迦上芥擻婆吽慕曩、迦上芥擻、迦上芥擻、摩婆上垵、薩迦上擻羅、芥訖灑引二合擻、納唎斯都二合去 底。 ○護摩増益に就て。 ○部主段 金輪を以て。 ○本尊段 加持より、召請、撥遣、諸供物呪、大悲之を修す。 ○諸尊段 三十七尊。 ○世天段 ○支度 ○卷數

○○大勝金剛法

此の尊に二傳あり、或は攝一切佛頂輪王と名け、或は愛染王と名く、各々由緒あり、三井流は此の尊を以て惣じて(三)一經の本尊となす、十二臂とは十二品を顯す、以ふに前の諸說中、習ひ一切佛頂輪王に攝するは、頗る本說に相ひ叶ふか、瑜祇經に曰く、十方淨妙國、三世及三界 最尊獨無比 此大轉輪王 能摧諸佛頂 能攝諸等覺 親近爲眷屬文 又印の功能を説いて曰く、最勝轉輪の印文此等の文は尤も佛頂に見えたるか、習愛染王、並に此の尊を以て一經の本尊となす、又十二臂を以て十二品等を顯す等の事、未だ說所を見ず云。

(三) 一經 瑜祇經なり、下の十二品品さは瑜祇經十二品なり。

(二) 種子 種子三形共に播破の徳あり、此れ諸佛頂に勝る、義を顯すなり。

○(二) 種子 ま ○三昧耶形 千幅金輪 ○道場觀 「壇上に紇里字あり、千葉の大白蓮華と成る、蓮花の上に吽字あり、變じて千幅金輪と成る、輪變じて大勝金剛轉輪王と成る、手に十二臂を具し、左右第一の手に智拳の印を持し、復た五峯金剛蓮花、摩尼、羯磨、鉤、索、鎖、鈴、智劍、法輪、十二大印 を持す、身色日の如くにして、五髻の光明あり、其の光主として十方に遍せざるなし、面門微咲して相好圓滿なり、前に熾盛の日輪あり、中に吽字有て勝金剛寶と成り、妙大寶幢を執る 右に怛洛の字ありて金剛蓮花鉤と成る、黄色輪に住し、鉤を執り大微咲す、左に惡字有て金剛寶大庫と成る、綠色輪に住して大圓鏡を持す、後に紇里字有て金剛大染蓮花と成る、紅色輪に住し大紅蓮を持す、八供四攝の菩薩、乃至無量の聖衆前後に圍繞す。」

○印眞言 ○智拳の印(二)手拳を作り、左の頭指を立 眞言、 唵摩訶縛曰朗、瑟尼灑、吽怛洛紇里惡吽。 ○本三昧耶の印(二)手内縛して、二中指を立て合 ○眞言 前の ○正念誦 前の眞言

○散念誦 佛眼、大日、本尊眞言、 ○伴僧呪 佛頂眞言を以て辨事す、 ○御加持呪 上に 勸請 大勝金剛遍照尊、三十七尊諸眷屬 ○發願 大勝金剛 勝金剛寶

諸眷屬等 ○禮佛 南無摩訶惹耶、縛曰羅郎瑟尼灑、 ○讚智 ○護摩 敬愛に就て

。部主佛眼を以て部
主となす。 本尊段 加持より、召請、撥遣、諸供物、加持物。 諸
尊段七尊 世天段 〇支度 〇卷數。

〇〇〇 隨求法

種子 波羅 〇三形、 梵篋 〇道場觀 「壇上に絃里字あり、轉じて赤蓮花座
と成る、座上波羅字あり、變じて梵篋と成り、轉じて隨求明王菩薩と成る、色深黃
にして八臂を具す、左の第一手に蓮花を持す、花上に金輪の光炎あり、次の手に梵篋
持し、次の手に寶幢を持し、次の手に索を持す、右の第一手に五股金剛杵を持し、
次の手には戟鉞を持し、次の手には寶劍を持し、次の手には鉞斧鉤を持す、衣服瓔珞
相好圓滿にして、四攝八供等の菩薩恭敬圍繞す。」 〇印 合二手掌を舒べ、左仰右覆せ左右相
ち是れ梵篋の印なり。 〇眞言 唵波羅波羅、三波羅、三波羅、印捺哩也、尾成達頼、吽引吽引
仁王經法等の如し。 〇眞言 唵波羅波羅、三波羅、三波羅、印捺哩也、尾成達頼、吽引吽引
嚕嚕左隸、娑縛合賀。 〇隨求陀羅尼八印 師傳に曰く、此の八印とは、本尊加持の
二中指二大指二小指共に立て合せ二頭指を風し 之を用ひざる所、振鈴に次で之を用ふ。△第一印 五股。丙
て二中指の背に立つ、即ち丙五股の印なり。 〇眞言 大隨求陀羅尼あり△第二印 斧 二手
各々舒べ五指合せ背相ひ着け、十指皆組み合す。 〇風輪の印の如し、但し彼の印は、左の大指を以
て右の掌に置き、而も右の大指端を合す、今の印は

〇〇〇 隨求法 此の印は、左の大指を以て右の掌に置き、而も右の大指端を合す、今の印は

〇風輪 轉法輪の印のこと。

〇第三印 龍索の形なり。

〇第五印 輪の形なり。

左の大指を以て右の頭指の背程に附け、右の大指を組み合す、是許り異なるなり。
沒引帝、鉢羅合縛羅尾、誦多婆曳、捨磨野、薩縛二合、鎧婆誦縛底、薩縛播
閉毗瑜、合娑縛合娑底合羅、娑縛都、七十母頼、八十尾母頼、佐隸佐羅、婆野尾誦帝
婆野賀羅泥九、胃地胃地、八胃駄耶胃駄耶、八十沒地里沒地里、八十薩縛但他引誦多、絃里
二乃野、足瑟離合薩縛引、賀引八△第三印 索 二手内縛して二中指圓かに立て合す〇
眞言 唵引縛日羅、二縛底、縛日羅二鉢羅、合底瑟恥帝、舜弟、八十但他引誦多、母捺
羅合地瑟恥合囊、地瑟恥合帝、薩縛引、賀引八△第四印 紐 二手虛心合掌して、二大指
並べ立て、二頭指を屈し中節の端相挂へ、二大指の上に置く印なり。 唵 畝頼、畝頼、八十
畝頼縛隸、阿鼻誦去、佐視輪、八十薩縛但他引、藥路、薩縛尾備也、二合鼻喇爾、十八摩訶縛
日羅合迦縛佐、母上捺羅合母捺哩合、帶引八薩縛但他引誦多、吃哩合乃夜地瑟恥合、縛
日隸合娑縛引、賀引九△第五印 輪 二手外縛して、二無名指立て合せ、二小指右を以
て左を押して交へ立つ。 〇眞言 唵阿密哩合多、縛隸、縛羅縛羅、二縛羅尾戎弟、吽
引吽引頗吒頗吒、娑縛合賀引△第六印 又 二手虛心合掌して、二小指を屈し、二大指を以
て二小指の甲上を押し、二頭指二中指二無名指、共に立て合せ去て指隙三載又の如くす

曇謨、阿利耶乞叉底矩奢、胃地薩但縛、摩訶薩但縛

見す、仍て一定し難し。○部主 實生を部主。○本尊段 加持印明より、召請印明、撥遣印明、諸供物呪、加持物呪。○諸尊段 三十七尊之を請す。○世天段 ○支度 之れ ○卷數 之れ

以上卷十一

國譯秘鈔卷十六

○天等通頸次第

○天等云云此れ通用なれども尊に由りて少々違ふ事あり。○淨地 金剛界次第の如し。

○壇前普禮 ○次に著座普禮 ○塗香 ○三密 ○淨三業 ○三部被甲 ○加持香水 枳里 灑淨 ○加持供物 枳里 枳里 ○覽字觀 ○淨地 ○觀佛 ○金剛起 ○普禮 ○表白神分祈願等 ○五悔 ○勸請 ○發願 ○五大願等 普供 ○大金剛輪 ○地結 ○四方結 ○道場觀 如來拳印 ○大虛空藏 ○小金剛輪 ○送車輅 ○召請 大鈎召印明、眞言未だ本尊名號並に四攝詞も加へず。 ○四攝 ○拍掌 ○虛空網 ○父院 ○大三摩耶 ○阿伽 ○荷葉座 ○五供印明 ○普供三力 ○提供 ○讚 ○普供三力祈願等 ○禮佛 ○本尊印等 先大日、本尊眷屬 ○散念誦 ○法施 ○金剛輪 ○一字 ○後供養 ○讚、普供等 ○廻向 ○五悔 ○解界 ○撥遣 彈指する

○荷葉座 左手大指を横へ印を外に向けるなり。

○毗沙門

二手の掌を仰けて跏上に置き、八度内に相ひ又へて、二大指頭相ひ跏ふ、先づ覽字淨法界の不淨を焼くと觀す、即ち欠字一虛空法界と成ると觀じ、次に空中の下方憾字風輪遍法界と成ると觀じ、次に風輪の上に饅字清淨乳悔を流出し風輪に遍滿すと觀す、是れ水輪なり。次に水輪上に波羅字有て金龜と成る、次に金龜の上に素字有て妙高山王と成り、四方所成す、次に欠字有て七金山と成る、此の金山の第一山を○持雙山と名く此の山頂に惡字有り、吠室摩羅奈宮と成り、八峯八柱七寶所成の樓閣と成る、其の裏に惡字(異)惡はあり變じて荷葉座と成る座上に吠字あり變じて如意寶珠と成る或は(口)變じて毗沙門天王と成る、容貌端正にして金の甲冑を著け珠冠を被り、左手全身寶塔を捧げ、右手は寶杵を執る、地天脚を承け、(三)部の藥叉左右に扶く、足前にまた惡字有て荷葉座と成る、座上に室羅字あり如意寶珠と成る上にあり珠變じて大吉祥天女と成る、白色の天女の形にして、左手に如意寶珠を持ち心に當て、右手施願の印なり、(四)四十二部の羅刹王、二十八部の藥叉將、左右前後に衛護し、無量の天男天女圍繞

(一)持雙山云云是れ法界定觀に於て以下は道場觀及び本尊像觀なり。○此の山の頂に如來拳印なり。○全身の寶塔を右手に捧ぎ、左の鐵塔に即ち南天の附屬を受け佛法の擁護する藥叉なり。○右はニランバといふ此の事西域記に記せり。○四十二部毘沙門の眷屬あり朝暮に行者を守る。

○(二)印 此印は諸
藥叉の主の印なり

○(三)伽駄捧 三股
載なり。
○(四)大師御傳 三
載者の印といふこ
となり。
○(五)交へ拳にす
内縛拳なり。

○(五)八葉の印 此
の八葉の上に三辨
寶珠を觀す、此の
寶珠の萬物を降すこ
となり。

して、七寶萬珍自然に充滿す、本より弘誓、無量盡無餘界の一切衆生を拔濟したまふ
是の如く觀じ已て、如來拳の印明にて七處を加持す。云云

○(二)印 合掌、十指内に相叉へ、二水豎てて、頭相柱へ、二風豎て、微しく屈し、左
空右掌中に入れ左火甲を押し、右空左空背より、左掌中に入れ右火甲を押し、二風與に
呵と招す。藥叉の印 ○眞言 曩謨引囉怛曩怛羅夜也、曩謨引失戰茶、縛日羅幡擊曳、
摩訶藥乞叉、細曇鉢多曳、曩謨引阿多骨嚕、藥室擊薩也、摩訶羅引惹、摩訶唎怛藍、
鉢羅尾沙弼、薩縛薩但縛咽底瑟南、怛囉也他、唵摩尼縛駄羅也、薩縛賀布嚕擊縛駄羅
也、薩縛賀摩擊栗託也薩縛賀、悉定迦羅也薩縛賀、吠失羅未擊也薩縛賀、難擊曩駄也
薩縛賀。○又印 虛心合掌して、雙地掌に入れ相ひ交へ、二空豎て並べ、水火豎て
室羅摩擊野、娑縛賀。○又印 除災軌説の 三昧智惠の手、内に指を合せ(口)交へ拳にす、二火
其の峯に合せ之を盛め寶形の如くす。口傳、中指針の如くし 印は口決を表示す。 ○眞言 唵縛日羅、吠羅
縛吽。 ○次吉祥天印明 ○心印 内縛三股印(被甲印の) 唵、室里泥室里泥、薩縛迦
里也、娑駄囉、志囉志囉、囉囉囉囉、阿落瑟弼、曩捨也、娑縛賀。 ○(五)八葉の印(口傳
唵摩訶室利耶曳、娑縛賀。 ○次大藥叉印 二拳向ひ合せ、二頭指を立つ、眞言(口傳)
して、七寶萬珍自然に充滿す、本より弘誓、無量盡無餘界の一切衆生を拔濟したまふ
是の如く觀じ已て、如來拳の印明にて七處を加持す。云云

○(二)勝 勝覺なり

○(三)吉祥天 形像
今の様々あれども、
左の道場觀は如沙門
長なり。右は施無
黒耳天。此の姉妹と
り、黒耳天。此の姉妹と
を苦難に來る處は
を苦しめ、衆生を
なり。隨れども、衆生を
を修する。故に吉祥
を唱へて、黒耳天
を除く。宜しき障
す。隨て散念誦に
なり。黒耳の法施

二風之 唵藥叉、濕縛羅、娑縛賀。 ○焚號 曩謨 吠室羅摩擊野、摩訶提婆囉惹。
○讚先四 唵、吠室羅摩擊、摩訶提婆囉惹耶、曩謨率都帝。 ○正念誦(小) ○散念誦(大) 佛
本尊三種、吉祥二藥
又、軍、大、一、法施。
祖師傳(二)勝に曰く、毗沙門の護摩は四段なり、即ち火天三部と諸尊段と本尊毗沙門
段、十方世天段なり。文

○(三)吉祥天

○道場觀 「觀念せよ、前に惡字有て大光明を放つ、此の光明大地に遍くして瑠璃地
と成る、地上更に惡字有り宮殿と成る、宮殿の前に寶臺あり、此の寶臺を周匝して流泉
浴池あり、寶蓮花開敷す、此の臺の四面に階道有りて寶樹行列し匠繞す、臺の中央に
壇場あり、壇場の中央に蓮花臺滿月輪あり、月輪中に室哩字有て變じて如意寶珠と成
る。如意寶珠變じて大吉祥天女菩薩と成る、身に寶冠を戴き、左手如意寶を持し、右
手施願の印を作す、頂背圓光あつて、紅色妙蓮花座に坐す、左右に梵王帝釋、及び
四天王あつて、並に眷屬天女有て周匝圍繞す、又吉祥天の上空に千葉の寶蓋あり、蓋

(一) 務抄 寛信法
務の作なり。

軌に曰く、先づ一切如來。普賢文殊等、一切菩薩に供養す。支 (一) 務抄に曰く、洗米
大二杯 石榴、菓子、香花、例の如し、但し燈明を用ひず。師説に曰く、燈明一燈、尙ほ光明細く佛前に
向けず外に向くるなり、佛供七杯、一杯本尊、一杯散紙大將、五杯五千子なり、本尊
には帳を垂れて供する時之を擧ぐ、只の時は覆ふなり。

○圖今は之を略す。圖下に曰く、名香、沈、白檀、薰陸。支 軌に曰く、像の面は西に向へ

持者の面は東にして像に對す。支 ○九子 加妙 増喜 自在 飛行 安

住 同蘇 愛授 香味得財已上九子 禮佛の時、本尊の次に此の九子を禮すべ

し云云 ○護摩軌に ○部主大 ○諸尊七尊

○本書 訶利帝母經請來不空大藥叉女歡喜母並に愛子成就請來不空訶利帝母因緣經一卷淨義鬼子母
經之を載す次第務抄に出づ

○(二) 十五童子供作法

「壇上に惡字有て變じて宮殿と成る、座上に吽字有て變じて(三) 苾芻と成る、苾芻變
じて栴檀、乾達婆王と成る、衣服嚴麗にして兼ねて甲冑を著け、左手左膝を押し。右

(一) 十五童子云云
此法は童子經書
寫りて供養する
法なり。鬼子小兒
を供養する時、此の法
を行はば、常ならずして
行法之は常に天等
部の通なり。此の尊
は梵天之樂人なり。
故に之を持す。云云
諸鬼神之主なるなり
て小兒を守るなり

(二) 散念誦 釋迦
は教主の故に、釋迦
動は乾達婆の本地
の故に。

手は三戟鉞を持す、前後左右に十五鬼神あり、及び衆多の眷屬圍繞せり。「此の如く觀
じ已て七處を加持すること常の如し。○乾闥婆王の印内縛して、水輪を申べ頭合する勿れ。○眞言に曰く、
歸命、尾戌馱、薩縛合羅縛引係合爾、娑縛合賀。○羅刹衆の印 金剛合掌 ○眞言
に曰く、歸命、藥乞叉、濕縛合賀。○正念誦 之を用ひず。○禮佛 不
動、栴檀、乾達婆、十五童子(私に曰く禮す) 之を禮 ○(三) 散念誦佛眼、大日、釋迦、光明、不動、大梵
藥又、大、三寶院權僧正勝覺曰く、童子經の栴檀乾達婆は不動の化身なり、故に道場觀の栴
檀乾達婆は後に不動を觀するなり、童子經の結線は、經中所説の結線呪を用ひず、不
動慈救の呪を用ふ。支私に曰く、大長の長延僧都の口決に曰く、童子經の四臂不動は
並に栴檀乾達婆王を本尊と爲す。支 ○十五童子佛供の圖今之を略す 供物等は生氣養者の方
に埋むべし、但し天一帝白の方を避くべし、埋むる時は鬼神遠行の呪を誦すべし。

○(四) 童子經略作法

師説に、見生氣方の水、寅の時之を汲んで硯水みなし、また東方桑木の東枝を取て、硯水に入る。
白黒月、八日、九日、十五日に書寫して之を供養す、若し件の日惡日に當らば餘の吉

(一) 童子經略作法
此法は供養法七
日なりとも意に任
せて修す。後正し
く經を書寫する時
の作法なり。硯水
を細く切りて入る。
桑木を細く切りて

(一) 井花水 寅の刻に汲む水なり。(二) 五色線 此の糸は前方に兼て縫り置くなり。(三) 去垢の明 墨を獨股な持つ如く、加持し終りて隨分能く磨り二度磨らざるように磨るなり。

(四) 十方佛 十方に禮せしむるなり。(五) 梵天座 机上に新き薦を敷くなり。(六) 鬼名云 立て掛けて置く。

(七) 財施 施餓鬼の如くす。

(八) 小芥子 芥子は供物にあらず、結界の爲なり。(九) 清淨の人 八齋戒を受けたる人なり。(十) 種々の寶號 乾達婆十五鬼淨等の名なり。

日を用ふべし。云云先づ平旦に(一)井花水を酌み、關伽並に關伽一前を調へ、(二)五色線を儲く、○次に三部護身 ○次東方に向ひ、梅檀乾達婆の名を唱へ、百次に返次に十五童子神の名返次に新たなる硯筆を以て經を書寫す。墨を以て(三)去垢の明を誦して加持し、筆を取て寶號二字を加持する、(四)二十返。之を書寫するの間、燒香之を斷せず。云云又其の母をして八齋戒を受けしむ云云書寫したて供具を辨備し之を供養す、供養作法常の如し、付供養法之を行すべし、眞言經供養作法なり、次に供養法了て、散念誦の後讀經、次に眞言結線を誦す百八結は五色の糸を用ふ。次に十五鬼を呼ぶ十五結次に後供養等は常の如し。

○次に封經了る。已上口傳に任せて記し了る。

〇〇同經供養作法大師御記に云云

月の八日、若しくは十五日、若しくは他の吉日を以て、先づ子母洗浴し新淨衣(五)十方佛を禮し、次に(六)梵天座を定め用ふべし次に十鬼王座を定め次に十五小鬼神座を定め(七)同(八)座毎に(九)鬼名を書して立つ、次に供物を備へ、洗米二杯、御明二杯、關伽一前、香一杯、種々の美味、菓子飲食を先づ梵天に供し、次に大鬼王に供す、中ん就く小鬼

神の爲めに乳を供す、若し五穀の粥堅ければ、板に盛りて杓子を以て散し供す、每板手を以て各座に宛て定む。先づ幣二捧を梵天に奉り、散供少しを以て小打して諸鬼神に散じ供すること宛も(一〇)財施の如くす。○次に三禮 ○唄 ○散花 ○次に表白 ○次に梵天の爲めに心經を誦し奉る。 ○次に四弘 ○次に童子經一返を讀む ○次に(一一)小芥子を取て藥師頂上に捧げて拜して後に壇上に置く。 ○次に五色の糸を以て師の左手に付く、糸の末を他の(一二)清淨の人に持たしめて一呪一結し一百八返に盈ちて後、(一三)種々の寶號を唱ふ、祈願は意に任す。○次に供養眞言 ○次に六種の頌 ○次に若しは呪願す ○次に清桶を以て梵天の供物少小、諸鬼神の供物を桶内に入れ、子生氣養者の方を尋ねて、穴を掘り件の供物を深く入れ、鳥犬の爲めに之を食せしめず、但し天一太白の方を避くべし、即ち鬼神遠行の大呪を誦す ○次に廻向 ○次に件の經を百八の結糸並に芥子等を、生子枕方に持たしめば、大安樂にして更に病患なし、世俗此の旨を知らず、只大底持を書くも殊驗なし云云 五色の糸六七尺許り所入なり。

私に曰く、鬼神遠行の大呪之を尋ぬべし、童子經に二呪あり、其の中に後陀羅尼を鬼

神遠行の大呪と名くるなり。○童子經陀羅尼 多咤他、阿伽羅伽齊、那伽伽齊、婆漏隸、祈隸伽婆隸、婆隸不隸、囉收爾、修羅俾、遮羅俾、婆陀尼、婆羅訶、昌利沙尼、那尼易彌那易、蘇婆訶。○又説く、多咤他、善陀善陀、(異)又た善、梵摩帝、菩提善提、摩隸或叉夜、婆舍利、婆多彌、婆羅陀、頭隸頭隸婆多頭隸、舍摩膩祇摩膩、蘇婆訶、蘇婆訶、膩婆膩羅、蘇婆訶。 已上の二箇の呪、成就院の別行鈔を以て之を出す。 已上卷十七

國譯秘鈔卷十八。

○北斗

(二)北斗 此法は息災所望天變惟異の時に祈り修す。

○一字頂輪王 ○種子殺嚕 ○三昧耶形 ○妙見 娑 ○三昧耶形 星形 ○北斗七星通用種子 嚕 ○各別種子 △貪狼星吠 △巨門星多羅

△祿存星迦 △文曲星鉢羅 △廉貞星吒羅 △武曲星囊 △被軍星婆

○三昧耶形 星 ○道場觀 「壇中に惡字有り變じて七寶莊嚴の宮殿と成る、其の中に頤哩の字有て寶蓮花臺と成る、臺上に勃嚕呼字ありて轉じて金輪佛頂と作る、其の後邊の左右に七荷葉座あり、座上に各に嚕字有て即ち北斗七星と成る、其の前後

(二)嚕 北斗は諸星の上首にして、次に文曲廉貞武曲の次なり。

左右の邊に多くの荷葉座有り、座上に呼字有て日・月・火・水・木・金・土・羅計、十二宮神・二十八宿と成り、各々眷屬圍繞せり。」

(二)或は云云 之を用ゐず。

師曰く、利根の人は、各別の種子善なりと想ふなり、少智の者は普通の字も亦失なきかと想ふ、但し別星供各種子尤も勝れたりと観ず。」文 (二)或は亦た虚空の儀式は之を召請すと観ず。 ○印明 ○一字頂輪王の印 内縛して、二中指直く整て銀形にし、二頭指常に屈して對へ、二大指の甲を押す。 ○眞言に曰く、 曩謨三曼多、那羅那羅、破左羅呼。 ○妙見 施無畏の印 ○眞言に曰く、 唵、素底里瑟多、娑縛賀。 ○召北斗の印 虚心合掌して、二大指を以て二無名指の甲を小しく開き屈して來去す。 ○眞言 曩莫三曼多、那羅囊、噫醜枳、頗伊、賀伊、那伊、迦伊、羅伊

(二)二大指の甲云云 二大指の端に着くるなり。

謨羅多羅、迦羅舍、娑縛合賀引 ○北斗惣印 左右の二火二空相係けて之を捻し、二水を前面に合指し、印と爲す、金剛智の軌に曰く、北斗八星の呪を又八女といふ。然れば七星は具さに妙見するか。 ○惣呪に曰く、 唵、颯多而曩野、伴惹密惹野、染普他摩、娑縛合弭曩、羅訖山合婆縛都、娑縛合賀。 ○諸曜惣印 二手合掌して、二空相ひ

(三)諸曜惣印 佛三摩耶の印と全風するなり。

○惣呪に曰く、 曩謨三曼多沒駄南、莫羅合醜濕縛里合野鉢羅合鉢多、儒低羅摩耶、娑縛合賀。 ○十二宮惣印呪 師説に、諸曜惣印呪を以て通用す ○諸宿惣印 二手合掌火指二空指相ひ交へ、右、左を押す。 ○惣呪に曰く、 曩莫三曼多沒駄南、諾乞灑合怛羅涅、蘇那爾曳、娑

次に本命曜印言○次に本命宮印言○次に本命宿印言○次に八字文殊印言○次に金剛吉祥印言○次に破宿曜印言○次に入我我入定印○次に本尊加持頂輪王○次に正念誦妙見○次に本尊加持の如し○次に字輪觀大○次に本尊加持の如し○次に散念誦上を見よ○次に入護摩○次に大日加持上の○次に本尊加持○次に三平等觀法界定印觀○次に壇上の火舎を取り壇の左角に之を置く○次に芥子を取て火舎の跡に置き之を加持す獨股を取て之を加持す火界の呪或は印を○次に四方四角上下に投げ結界を成す○次に火天三摩地に入る定印、種子、三形、○次にに火の天印を結び身の四處を加持す眞言小呪、印常の如し○次に火天小呪百返之を誦す○次に左右の脇机の供物等を取て壇上に置き、先づ左の脇机には散香・切花・丸香・鈴を取て左邊に之を安す○次に右の脇机には塗香加持物、鈴を取て右邊に之を置く○次に鈴を取て杵を左脇机に置く○次に二十一支の乳木を取り、金剛盤上に置く○次に三股を取て之を持す護摩の開始終之を持す○次に薪を積む。積薪の圖下に注して曰く、此の上、左より次第に六支を之に置く、合して十一支なり、但し此の薪を以て行三段、謂く火天段・部主段・本尊段なり、若し薪盡きて火滅せばまた薪一兩を加ふべし上○次に爐薪に火を放つ○次に火を扇ぐ七返或は三返觀呪次第の如し○次に灑淨すること三度○次に三股を以て爐薪を加持す根里根里○次に火

(二)薪を積ます
自行の時の事なり

天を勸請す一花を取て薪上に投ぐ、火天の大印を結び大眞言を誦し、眞言の末に四字の明を加へ之を召す、印・言・觀念・啓白は次第の如し○次に嗽口三度○次に塗香三度○次に蘇油大約三度○次に乳木三支○次に飯小約三度○次に五穀小約三度○次に切花三度○次に丸香三度○次に散香三度○次に蘇油大約一度○次に普供養印明三刀偈祈願常の如し○次に漱口三度已上啓白觀呪皆次第の如し○次に撥遣先づ一花を取て小呪を誦し佛前に投げ、本尊の大印を結んで、大眞言の末に奉送の句を加へて之を撥す、觀並に啓白次第の如し△第二金輪段 灑淨なく、又(二)薪を積ます。○先づ嗽口三度○次に爐口加持上の○次に自觀印 「觀せよ、心月輪中に勃嚙ボロム字有て、變じて八幅金輪と成る、輪變じて佛頂輪王と成る」釋迦、金輪尊形常の如し○次に自ら加持す ○印内縛して二中指を直く立て釧形にし、二頭指平らに屈し跏趺へ、二大指の甲を押す。○眞言に曰く、曩謨三曼多、陀羅陀羅、波左羅吽。○次に一花を取て薪上に投ぐ ○次に本尊觀印 「觀せよ、爐中の花、八葉の蓮花と成る、其の上に勃嚙ボロム字有て變じて金輪と成る、輪變じて頂輪王と成る。」○次に召請大鈎召の印を結び、上の頂輪王の眞言を誦す、眞言の末に○次に嗽口三度○次に塗香三度○次に蘇油大約三度○次に乳木三支○次に飯小約三度○次に五穀小約三度○次に切花三度○次に丸香三度○次に散香三度○次に蘇油大約一度已上供物の眞言は自加持の如し。息災の句を加ふ、已下段段に句を加ふることに同じ○次に普供養印明三刀偈祈願常の如し○次に嗽口三度○

(一) 半獨股 獨股の半分なり。

(二) 猿冠 獅子冠の如し。
(三) 形色青黒六字明王を常に黒六字といふは身色青黒に依てなり。
(四) 不動は釋迦金輪と同體なり。
(五) 大威徳は蓮花部の教令輪なり。
(六) 加之云云以下範後の私の詞なり。
(七) 十二金剛十二天の事にして不動は十二天の首なる故なり。

金色なり、六面は慈悲の相、左手紅蓮花を取り、右手は施無畏なり、馬頭の身は色青し、右手蓮を取り、蓮上に梵篋あり左施無畏なり、十一面の身は肉色右手紅蓮を取り蓮上に花瓶あり、瓶の口に(一)半獨股を立つ、左施無畏なり、準提佛母は身色紺青にして、右手青蓮花を取り、左施無畏なり、如意輪の身は色白く、左に蓮を持す、蓮上に三股杵を立て、右は施無畏なり、次の如く圍繞す、其の聖觀音の前に當て一蓮花座あり座上に頤哩字あり、字變じて大刀と成り、刀變じて六字觀音の身と成る、頂に(二)猿冠を戴き、(三)形色青黒にして六臂を具足す、左右第一の兩手は俱に三股の印を作し、左第二手には三戟叉を持し、右第二手には大刀を持し、左の次手には月輪を持し、右の次手には日輪を持す、怨家を調伏し萬願を成就するの形なり、教令輪(四)不動・大威徳の二尊侍衛せり、合掌せる天子、飛天等前後にあり、及び蓮花部の中の聖衆皆壇上にあり乃至天龍八部等前後左右に圍繞せり。(五)加之ならず、恐くは爰に愚案を加ふるに、諸の行法道場を觀するの時、必ず大壇は本位の如く、不動並に(六)十二金剛天等之を觀置すべし、其の故は、諸行法世天段は必ず行するが故なり、尤も其の意あるか。
○次に七處加持範後次第の意なり ○召請 蓮花部心印明、鬘鬘鬘積の句を加へて之を召す

(一) 觀宿 尊師付法の弟子なり、此の印は觀宿の夢中に感得し玉ふさ。

(二) 明仙 天臺の祖師といふ。此の印は内三股の印なり。
(三) 結線 本尊呪を以て結す。
(四) 經 六字經なり。

(五) 六足尊 大威徳尊なり。

○禮佛 南無、六字章句觀世音。私に曰く、曇謨沙吒阿吃灑縛囉枳帝、胃地薩怛縛

摩訶薩怛縛 本尊加持先づ金輪、次に正觀音の印明之 ○觀宿傳二手各々大指を以て中指頭を捻し覆せ、頭指を左大指中指の間に入る、又左の小指を以て右の中指大指の間に入れ右の小指左の無名指頭を押し、右の無名指を以て左の頭指の頭を押し、成じて四處を加持す。口傳に左右の大名檢す云云此を以て深秘となす。

○眞言 唵、佉知佉知、佉吽知絨壽絨壽、多知婆知。○明仙傳二小指二無名指を掌内立て、二頭を以て中指の上節に付け、二大母指雙へ立て、即ち成す眞言上の如し。 ○勸請 ○大聖慈悲六字尊、蓮花部中の諸眷屬。○

正念誦本尊 ○本尊加持前の ○字輪觀五大、或は ○大日加持常の ○次に本尊加持前の ○六觀

音印明、白衣、不動、大威徳。○散念誦佛眼、大日、金輪、本尊、六觀音、白衣、不動、慈息災、部主、息災、大威徳。調伏本尊正觀音息、六字明王調。諸尊段六觀音、不動、大威、世天段常の如し、但し呪呪神等を加へて之に ○三類形を焼く事 護摩已て、未だ鈴杵を置かざる以前に之を焼く、謂く右脇机に小土器を入れ之を置き、三類形を取て金剛盤上に置く、先づ不動慈救の呪を以て

一百八返之を誦し、次に(五)六足尊の呪を以て、一百八返之を誦し、然る後に降三世の眞言を誦し、獨股を以て二十一返之を加持す、其の後爐の邊の上に三類形を置き、伽知の眞言を誦して之を焼く、焼く間に觀想せよ、一切衆生惡業を作るに依て、生死に輪廻す、此の業障を淨除して解脫灌頂の名を得云云。先づ天狐を焼き、次に地狐、次

二塔 名寶塔なり。

三印 常の塔印の如くにして二大を少しく入れば、大に少しく開け、常に少しく開け、常即ち兩部の大佛と習ふなり。

三此の如く云 來の寶塔は三日 味耶身なり、即ち 法界の胎藏の佛 八葉の蓮花の尊なり。

り。

○道場觀 「觀想せよ、心月輪の上に八葉の蓮花あり八分の肉團、即ち八葉の蓮花を成す、花臺の上に惡字あり、字變じて二塔と成り、塔變じて大日如來と成る、身色閻浮檀金の如く、法界定の印に住して利益衆生のために釋迦の身を現す智吉祥の印に住す、娑婆世界に出で、法花經を説き給ふ、此の娑婆世界、其の他瑠璃坦然平正にして黄金を繩となし以て八道を界まがふ、寶樹行列し、諸の臺樓、皆悉く寶の所成にして、諸の菩薩衆咸な其の中に處せりと觀す。」

○三印 率都婆の印、二手虚心合掌して、二大指を並べ立て、二頭指の中部を屈して端相ひ柱へ、二大指上に置く

口傳に曰く、説文の如く率都婆の印を結び、二大指を小しく掌に入る、惣じて斯の印を以て塔と爲す、是れ理智不二大日如來の三昧耶身なり、二大指を以て掌に入るとは、兩部の大日を表すと爲すなり、右の大指は金剛界の大日、左の大指は胎藏の大日なり、即ち兩部の大日をして塔内に坐せしむるなり、三此の如く之を觀念すべし、レ或る祕説に曰く、率都婆の印を結び、二大指少しく開く、二大指を二頭指の腹に付け乍ら少しく開くなり、寶塔は戸を開いて觀るべきなり。

○眞言 曩莫薩縛他他葉帝、毗ビ庚ユ尾ビ濕ジ縛シ目ボ契ケ毗イ藥、薩サ縛バ他、阿ア阿ア暗アン惡ク、○或る説に曰

く、印智拳の印、二手拳に作り、左の頭指を立て、右拳を以て之を握る。

問ふ、此の法は智拳の印を用ふる由緒云何。答ふ法花經に曰く、十方佛土中に唯だ一乘法ありレ文金輪儀軌に曰く、十方刹土中に唯だ一佛乘あり、如來の頂法諸佛の體を等持す、是の故に智拳と名くレ文法花經は智拳の印と、文義已に叶ふ、之を依用するか。

○眞言 問ふ、印とは金剛界の大日なり、眞言とは胎藏の大日なり、此の説の習、由緒如何、答ふ、兩部合行の義、理智不二の旨を表す、レ但し此の傳は、二規模の説に非るか。

○正念誦 眞言は前の如し、謂く 曩莫薩縛他他葉帝、等 ○散念誦 先づ佛眼、次に大日、次に本尊、次に無量壽命決定如來の眞言之を誦すべし、次に讀經。 讀經の間に

觀念せよ、舌端に八葉の蓮花あり、花上に佛有りて結跏趺坐したまふ、猶し入定の相の如し、妙法蓮華經の一一の文字、佛の口より出づるに、皆金色にして光明を具し、虛空に遍列し、一一の文字みな變じて佛身を成じ虛空に遍滿せりレ文是の觀を作す時、漸く身心輕安なり、即ち定中了了に一切佛の甚深の妙法を説きたまふを見上ることを得、聞き得已て思惟し、則ち法界眞如觀に入れば、一縁一相平等にして猶し虛空の如し。

三規模云云 印の上不二を習ひ、眞言の上不二を習ふ、取合して一印とあらす。

法花經御修法所

奉供 大壇供 護摩供 十二天供 聖天供 諸神供 奉讀 妙法蓮花
 經。 奉念 佛眼真言、大日真言、部主真言、本尊真言、無量壽命決定王如來真
 言、法花肝心真言、同じく補闕真言、護摩真言、一字金輪真言。
 右、年月日 行事阿闍梨、

〇〇理趣經法

懸説經の曼多羅は、本尊の爲めに之を修す、行法は別行次第に就て之を修す、
 其の作法は金剛界に依る云云問ふ別行作法に就て之を修す云云 金剛界等此の法に就
 て此の法を行せしむる事、然る可からざるか云何、答ふ、尤も大法に就て之を行す
 べきこと然るべき事か

〇本尊、大日秘密の源底なり 〇種子、オ 〇三昧耶形、寶珠委しくは道場觀に載す 〇道場觀

「虚空の中に惡字あり、變じて他化自在天王宮を成す、中に一切如來常に所遊の處、
 吉祥は大摩尼殿と稱嘆す、種種間錯して鈴繪繪幡微風に搖撃し、珠鬘瓔珞半滿月等

護摩真言の事なり

茶羅に能説と所説曼
 茶羅の二あり能説曼
 は序品の如是より
 下は所説の曼茶羅
 なり今本尊の所説の
 曼茶羅を本尊とな
 す金剛界の大日
 三形とす皆寶珠
 通は別行次第
 法に由りて大日
 本尊となし金剛
 薩埵とす此
 親王の傳なり

而も莊嚴を爲す、其の中に頤哩字有て變じて大蓮花王を成す、曼茶羅あり其の中に滿
 月輪あり、上に頤哩字有て變じて千葉の大白蓮花王を成す、五鈷を以て莖となす、是
 れ一塵の中の土なり、また遍法界の身なり、復た我身なり、また一切衆生身なり、其
 の蓮華の上に鑲字有て如意寶珠を成す、五色光を放つ、光の中に鑲・吽・但洛・頤哩・惡
 字あり、各々如意寶珠を成す、鑲水馬・吽馬・但洛馬・頤哩馬・惡馬は是れ遍照身中の五智功德な
 り、此の如意寶珠變じて法性大日如來を成じ、定印に往して金剛寶冠を戴く、冠中の
 五智佛、身色白月暉なり、結跏趺坐して白き輕羅綿衣を著け正受到住す、金剛手菩薩、
 觀自在菩薩、虚空藏菩薩、金剛拳菩薩、文殊師利菩薩、纒發心轉法輪菩薩、虚空庫菩
 薩、摧一切魔菩薩、是の如き等の八十俱胝大菩薩衆と恭敬圍繞したまふ、而してため
 に般若波羅蜜理趣經を説きたまふ。〇印 〇智拳印 二手金剛拳に作り、左拳を申べ立
 〇眞言 唵阿、娑縛合賀。〇大惠刀 二手虚空合掌して、二大指を並べ立て二頭指
 般若無盡ナカガ・曇謨婆去トモボク・誦縛戴引鉢羅二枳釁合シクニ・播引羅弭引曳、唵訖哩ニ合・入引戌嚕ニ合
 底尾惹曳、娑縛引訶。〇獨股の印 二大指二小指各々立て合せ端を柱ふ。〇眞言 唵摩
 訶蘇誦、縛日薩但縛、弱吽鑲、斛蘇羅多薩但鑲 以上本尊印眞言、△段段印明振鈴

般若の體なり
 阿字に二
 三印は
 明は
 金部不
 明の二
 智印は
 心なす
 此の法
 眞言教
 不空三
 此の法
 の時五
 宮眞寂
 の道場
 般若云
 依三
 依三
 依三

(二) 或は説く
に用ひす。 常

(三) 文殊の印
生を離れしむる心
泥を離れしむる心
なり。即ち戲論を
断す。

(三) 虚空庫 常に
は無名中頭三指
交へ立て二大指
爾れも今は無名
中指は外縛のみ
するこまなり。

に之を

○金剛薩埵の印 右手金剛拳に作り、右胸に當て、

○眞言 ㏽ ○大日印如來拳

用ふ。 ○金剛薩埵の印 左手同拳を作りて左胸に安す、

○或は説く、智拳印を用ふ 二手金剛拳に作り、左拳大指

印、謂く申べ立て右拳を以て之を握る。

○眞言 ㏽ ○降三世 二手金剛拳に作り、背合せ、二小指を相ひ懸

る。 ○眞言 ㏽ ○降三世 二手金剛拳に作り、背合せ、二小指を相ひ懸

る。 ○眞言 ㏽ ○降三世 二手金剛拳に作り、背合せ、二小指を相ひ懸

○觀音の印 二手金剛拳に作り、左拳を仰けて左の乳程に當て、右拳、小指を立て申べ、爪甲を以て先づ左の

如く次第に右の小指の甲を以て各指の腹を押し上げ、之を立てしめ、次に又右の小指を以て三度左の掌内を掻く

此の印は八葉の義を開くなり、而も五指は五葉なり、今三葉之なり、仍て三度掌を掻き、今の三葉を開かしむる

なり私に曰く、金剛拳は同事たりと雖も八葉の印を開くなり、最も蓮花拳を作るべきか

蓮花拳とは胎藏拳なり。 ○或は説く、八葉の印を用ふと、然るに常には以前の印を

用ふべし。 ○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

○眞言 ㏽ ○虚空藏の印 二手外縛して、二頭指中節を並べ

(二) 五部具會 五
部の具會は四日
部の具會は四日
て此の五佛五智
り、五智互に五
部具會するが故
に、此の字は五
部具會するが故
に、此の字は五
因果不二を表す。

(三) 呪阿云云 不
二の呪の故なり。
(四) 呪の初めなり。
惣呪の初めなり。

はゆる内五結の印なり。 ○眞言 ㏽ ○七母女天 右手蓮花拳に作り、頭指を申べ

○三兄弟の印 合掌 ○眞言 ㏽ ○四姉妹の印 合掌 ○眞言 ㏽ ○五部具

會 二手外縛して、二中指二大指二小指各々立て合せ二頭指を屈して

二手外縛して、二中指を屈し掌の内に入れ ○眞言 ㏽ 振鈴の次に、始め金剛薩埵印

明より、五秘密印明に至るまで次第に之を用ふ。 ○次に八供養常の如く之を用ふ、

獨磨會を 次に事供養等常の如し ○正念誦 此の眞言を用ふ ○散念誦 佛眼、大日、本

行ぜず 惣呪般若菩薩、降三 ○伴僧 三力偈の次に ○御加持呪 不動尊 ○勸請發願禮佛、皆大

世、大金剛輪一字 文違ふこまなし ○讚 四智讚或は説く、先づ四智讚の次に心略讚。 ○護摩

日に依て之を用ふ 金剛界等の如し全 息突に就て之を。 部主段 金剛薩埵を以て。 種子 ㏽ 三昧耶形、五結。 ○印外五結

の印。 ○眞言 ㏽ 摩訶蘇迦縛曰羅薩怛縛、弱畔鏝斛、蘇維多薩怛縛。 ○供物 惣

○本尊段、加持印明より召請印明、撥遣印明、諸供物呪 ㏽ 加持物呪 同

○諸尊段 三十七尊 之を請す ○世天段 ○支度なし ○卷數なし

○同法 或は

國譯秘鈔卷六

○(二)壇所 續飯を以て付けしむ、雨乞は急事なる故に續る間無き故なり。

鋪は大壇に敷くの料なり、雨受茶籠共に青色の絹を以て御衣絹となす。前日早筆の佛師を召し儲けらるべきの旨行事の許に示し送る見成尊の書状

○幡を造り梵字を書く事 (一)壇所の屋の上に幡十三流、道場内に幡二十八流、合して流なり青色の絹を以て之を造る、手足の端等は續飯を以て付けしむ、屋の上の幡十三の内、中央の幡に一字真言並に輪形を書く、餘十二流は梵字を以て十二天の真言を書く、壇場内の幡二十八流も又梵字を以て諸龍真言を書く。○幡懸け様の事 ○幡敷の事

勝覺權僧正は青色幡四十一流を用ひらる、成尊僧都亦た然なり。但し長さ小野僧正或る度に青色幡二十一流を用ひらる。不同なり○幡長短の事 成尊僧都支度に曰く、一流、一丈六尺、十二流、各々一丈、二十八流、各々五尺。勝覺僧正支度に曰く、一丈の青幡一流、一丈五尺棹一を相ひ具し、八尺の青幡二十八、六尺の青幡十二、一丈の棹十二を相ひ具す。○文○籍フダを立つる事 東並に北道の邊に籍を立つ、其の文に曰く「親疎上下結

界内に來る可からず、懈怠の障礙に依て制止する所也。○神供の事 壇所東池の邊に大石ある本ネなり、之を神供の所爲として、毎夜之を修す、幣は十五本なり、難陀跋難輪蓋の三龍を加ふるなり、各々印明之を用ふべし。私に曰く、善女龍王を供すべし仍て用意すべきか又箆を著て之

を行す、近來は箆を敷いて之を行す尤も宜し云云○水天供の事 東の庇に於て之を修す、但し便宜に隨ふ可きか、壇上に青色の幡二流を立て、中央に青瓷の鉢を安して水を入れ、其の前に青色糸曲げて之を置く、闍伽一前常の如し、紺布を以て壇敷となす。抑々此の水天供は公家の沙汰に非ず、大阿闍梨私の用意なり。○伴僧水天の方を拜する事 初夜の時、伴僧庭に下り敷く水天の方敷くに向つて禮拜するなり彼の天を拜するなり。其の詞に曰く、「南無甘雨、普ねく潤して五穀を成じたまへ。」或本には五穀成就す。文僧正記に曰く、南に向つて大師並に善女龍王を禮拜す。○文○孔雀經御讀經の事 御修法伴僧の外、別僧を請して断えず孔雀經を轉讀せしむ。五龍祭の事 大阿闍梨公家に奏聞して三箇日之を行せしむ。私に曰く、即ち御修法第二日許に奏聞すべきか、奏聞の狀は成尊僧都の消息を以て本と爲すべきか是れ即ち陰陽寮の所爲なり。御修法第五日以後三箇日之を行せしむ。其の旨成尊僧都書狀に見ゆ陰陽口傳に曰く、茅を以て五龍の形を作り、其の中に龍の梵字を籠む、即ち伴の梵字は阿闍梨之を書く。○文○小野僧正、第四度御修法、第四日に之を祭らしむ云云私に曰く、伴の日、日次ヒナミ吉か。

○(三)龍供の事 ○(四)結願の事 儀式作法は常の修法の如し、但し後鈴の次に二の讚了て後、二十人の伴僧列立して、吉慶漢語三段を誦す、饒鉢を用ふ、作法は常の鉢に

○(一)吉か 日の良辰といふことなり。○(二)龍供の事 此の法は最極秘事なり、大阿闍梨一人の作法なり。○(三)結願 願成就して雨を降して後に之を修す。

(一) 毗盧舍那云
云、理體の合殺
なり、大壇を繞
ること七八返す
ども三返す。

同じ、三段了て上番の十人大壇を繞て行道す、下番の十人列立して鏡鉢を打つ、作法は全く無言行道の如し、三匝以後各々皆座に著く。師説に曰く、法成就の時、大阿闍梨並に伴僧引率して、(二) 毗盧舍那の寶號を唱へ、大壇を繞ること七八返。元梅鈔永久に曰く、二十一日結願、頭辨顯隆朝臣、勅使となり來て勸賞を座主に讓る、阿闍梨は律師に補任せしむ」文
以上卷五

大正十年十一月廿八日印刷
大正十年十二月十日發行

國譯密教事相第二奧付
【非賣品】



禁轉載

編纂者 塚本賢曉
東京府北豊島郡高田町字雜司ヶ谷三百十二番地

發行者 伊豆宥法
東京市牛込區若宮町三十五番地

印刷者 川邊多門
東京市本郷區湯島三組町八十一番地

印刷所 國譯密教刊行會印刷部
東京市本郷區湯島三組町八十一番地
電話 下谷九式參番

發行所 東京市牛込區若宮町三五
電話 替東京五〇一八七
番 二五二三番
國譯密教刊行會

終